

観光文化

Tourism Culture

215

October 2012

特集

観光地づくりの本質を探る

—観光まちづくりの「心」とは

巻頭言

倉敷—「まち」の価値と市民生活の美しさ

～お客様の数は二番目に大切な指標と考えたい～ 大原 謙一郎……1

特集

1 人間の「喜び」と「生きがい」を生む観光地づくり 鈴木 忠義……2

2 観光とまちづくりの間にあるもの

— 由布院の四十年の足跡から見えること 米田 誠司……8

3 「泉質主義」を貫き、時代を紡ぐ草津温泉

— 次世代へのバトンタッチが責務 黒岩 裕喜男……13

4 地域がビジョンをつくり、実行する阿寒湖温泉

— 前田一步園の理念を生かす 梅川 智也……19

特集テーマからの視座

観光地づくりの新たな視座・視点

— 特集テーマに学ぶ理論と実践 梅川 智也……24

研究成果の紹介

国立公園の利用者意識に関する研究

五木田 玲子……28

JTBF通信 財団活動のいま……31

連載

I あの町この町 第51回

「そこそこ」の哲学—福島県棚倉町 池内 紀……33

II ホスピタリティーの手触り 72

三年後のキリマンジャロから 山口 由美……38

旅の図書館 掲示板

出版物のご案内・当財団からのお知らせ

改訂創刊号

『観光文化』の編集方針と誌面の刷新について

公益財団法人日本交通公社 会長

志賀 典人

日頃より、当財団の活動にご理解・ご協力を賜り、御礼申し上げます。また、当財団機関誌『観光文化』をご愛読いただき、ありがとうございます。

このたび、当誌の内容・構成の見直しによる編集方針の刷新を行い、本号より新たな誌面で発行することとなりました。また、発行を年四回(季刊)に改めることとなりましたので、併せてご案内申し上げます。

『観光文化』の歴史は古く、一九七六年(昭和五十二年)十二月に創刊、第1号が発行されました。以降、今年で三十六年目を迎え、本号で215号を数えております。その間、さまざまな分野の専門家の方々にご寄稿いただくとともに、多くの方から内容やテーマ等を中心にご意見やご感想を賜りました。この場を借りて感謝の意を表する次第です。

これまでの『観光文化』は、主にそれぞれの時代における観光のトピックスを特集テーマに据え、各テーマに造詣の深い方々に執筆をお願いする形でまとめてまいりました。おかげさまで、多様で深奥な知見が凝縮された冊子として高い評価をいただいております。文字通りわが国の観光文化の発展に寄与してきたものと自負しております。

今回の刷新では、この理念を継承しつつも、これまでの皆様からのご指導により蓄積されてきました当財団の知見に基づく論考・提言を発表する場として位置付ける方針といたしました。具体的には、当財団研究員の研究・事業活動を基に特集テーマを設定し、研究員自らが執筆に当たるとともに、併せて外部専門家の方々からご寄稿をいただき、わが国の観光文化発展のための問題提起、情報提供、交流の場となるような誌面づくりを行ってまいりたいと考えております。このほか、公益財団法人としての公益活動を幅広くお伝えすることを目的に、研究成果や活動内容の紹介、「旅の図書館」からのご案内の充実等を図ってまいります。

折しも、創業百周年および公益財団法人への移行という節目での刷新となりましたが、今後わが国の観光文化の振興を目指し、『観光文化』のますますの内容充実および価値向上に努める所存です。ぜひとも、刷新第一号となる本号に対し、幅広いご意見・ご感想を賜れば幸いです。

引き続き、『観光文化』をご愛読のほど、よろしくお願い申し上げます。

(しが のりひと)

私が住む倉敷の美観地区（市条例）は「観光地」として知られている。その中の大原美術館も「観光資源」と呼ばれる事がある。たしかに、倉敷は毎年多くの観光客を迎え、大原美術館では世界各地からのお客様が充実した時間を楽しんでおられる。観光関連の仕事で生活している市民も少なくない。ここは、まぎれもなく「観光地」である。

そうであるには違いないが、私たちは、倉敷が外見のみを飾った「観光業のための観光地」になったり、大原美術館が「町の集客装置としての観光資源」になってしまったたりすることは、厳に避けなければならないと考えている。

もちろん、この街に多くのお客様を迎えるのは嬉しいことである。私たちが愛で育てたものに親しんでいただき、美しい街の美しい暮らしを共に楽しんでいただくことも大きな喜びである。

また、お客様へのサービスに関わるさまざまなビジネスが繁栄することも地元にとっては大変重要で、少しでも多くのお客様をこの地に迎えて、良い時間を過ごしていただくための努力と工夫を怠ることは許されない。

倉敷—「まち」の価値と市民生活の美しさ

～ お客様の数は二番目に大切な指標と考えたい～

公益財団法人大原美術館理事長 倉敷商工会議所名誉会頭 大原 謙一郎

しかし、これを自己目的化させてはならないと、私たちは自戒している。集客を全てに優先させ、街自体の価値や、市民の誇りと生活をなおざりにしてはならない。生活と文化が「観光の下僕」になってしまったら、倉敷も大原美術館も、その日から劣化しはじめるに違いない。

そういう意味で、私たちは、いわゆる「入込み客数」は、「二番目に重要な指標」だと思いたいと思う。一番重要なのは、この街の価値と市民の生活の美しさである。大原美術館にとっても、館の価値と使命が最大の関心事である。お客様の数はもちろん重要だが、それは、一番ではなく、二番目に重要なことである。そう考えてはじめて、街も、美術館も、魅力を薄れさせずに永続することが出来るのである。

観光事業は、国の姿を問い、地元の誉れを高める事業である。そうである以上、「観光地」に暮らす私たちにとっては、自らの姿を常に問いなおし、本当の地元の誉れを磨くことこそが一番大切なことになる。私たちは、そう心得て、日々自らを省みていきたいと思う。

（おおはら けんいちろう）

観光地づくりの本質を探る

——観光まちづくりの「心」とは

観光地づくりの本質とは何か？

観光地におけるまちづくり＝観光まちづくりの成果は、単に観光客数だけでは測れません。では、その「心」とは何でしょうか。当財団と長くお付き合いいただいている鈴木忠義氏へのインタビューと3つの観光地の事例を通じて、“地域が自ら考え、行動する自立した観光地”へと構造を変えていく観光地づくりの本質について探ります。

人間の「喜び」と「生きがい」を生む 観光地づくり

東京工業大学
名誉教授

鈴木 忠義

観光の体系化に早くから取り組んでこられた日本観光研究学会の初代会長・鈴木忠義氏（東京工業大学名誉教授）に、長年にわたる実践を通して育んでこられた観光地づくりの基調となる考え方について語っていただきました。

終戦後の「観光立国」

——観光との出会いは、いつ、どのような時代だったのでしょうか。

【鈴木】もともと好奇心や探究心が強くて写真や旅行が好きだったこともあり、終戦後「観光立国」

が盛んにいわれていた昭和二十三年、僕が東京大学土木工学科三年生の時に、新聞広告で見つけて東京都総務局観光課による観光講座「観光の理論と実際」を受講したのが観光との出会いです。当時の有識者たちが講師陣（図1）で六日間の講座を六年間、東京都は本当に真剣にやっていました。観光というのは、これくらい本腰を入れて考えるべきものなのです。昭和二十五年に朝鮮戦争が始まった途端に工業が優先となり観光どころではなくなると、やがて閉講となりましたが、講師でいらしていた林学博士の田村剛先生（注1）、

当時東京都建設局長の石川栄耀先生（注2）の講義に感銘を受けました。また、大学の授業に農学部からいらしていた加藤誠平先生（注3）にも大変お世話になり、僕自身はこの道に入る縁ができました。

観光の知の体系化と人づくり

——観光の知の体系化の試みは、どのような形で始めたのでしょうか。

【鈴木】昭和二十四年、東大農学部林学科造園学教室（研究室）に就職してから十二年半の間に、趣味と

図2 『観光開発をどう考えるか』目次

- 1 観光活動の社会的背景
- 2 だれが観光旅行をしているか
- 3 なにが観光の対象になっているか
- 4 観光のしかたはどうなっているか
- 5 観光消費はなにを意味するか I
- 6 観光消費はなにを意味するか II
- 7 観光活動とは
- 8 観光開発と立地条件
- 9 観光開発の留意点
- 10 風景の保護と育成
- 11 風致の造成と破壊
- 12 産業と風景
- 13 各種事業の観光開発への協力
- 14 文化財と観光
- 15 交通施設
- 16 宿泊施設
- 17 園地と小施設
- 18 休憩舎・便所・展望台
- 19 売店・食堂
- 20 総合休憩施設
- 21 スポーツ・レクリエーション施設
- 22 観覧施設

出典：鈴木忠義著・日本観光協会 昭和36年発行

図1 第1回観光講座(昭和23年)の講義プログラム

- I. 総論
 - 1 観光立国論 高田寛(参議院議員 日本交通公社理事長)
 - 2 観光産業論 木村禎八郎(参議院議員)
- II. 観光事業の理論
 - 1 観光事業概論 新井堯爾(全日本観光連盟 副会長)
 - 2 観光資源論 田村剛(林学博士)
 - 3 観光と都市計画 石川栄耀(東京都建設局長)
 - 4 観光東京の今昔譚 安藤直方(東京都史編纂委員)
- III. 観光事業の経営
 - 1 観光事業経営論 小林新(早稲田大学教授 商学博士)
 - 2 サービス論 徳川義親
 - 3 観光宣伝論 新保民八(株式会社花王 常務取締役)
 - 4 見返品と観光物産 宮田勝善(観光物産連合会 理事)
 - 5 新たに発展を予想される観光事業の話 武部英治(全日本観光連盟 事務局長)
 - 6 観光施設論 間島大治郎(運輸省観光課長)
 - 7 接客の実際 高久甚之助(日本ホテル協会 理事長)
- IV. 国際観光一般
 - 1 戦後の海外観光事情 春山行夫(雄鶏通信 編集人)
 - 2 アメリカの印象 高田市太郎(毎日新聞 欧米部長)
 - 3 欧州旅日記 渡邊紳一郎(朝日新聞 編集局総務室)
 - 4 観光と自然 松方義三郎(共同通信 編集局長)
 - 5 ガイド商売往来 殖粟文夫(リーダーズダイジェスト日本支社)
 - 6 日本風土記 中村孝也(文学博士)

出典：東京都総務局観光課「観光の理論と実際」(第1回観光講座全集) 昭和24年発行

実益を兼ねて観光関係の調査・研究、写真を蓄積し、昭和三十六年に工学部専任講師着任のタイミングで『観光開発をどう考えるか』(発行…日本観光協会、現・社団法人日本観光振興協会)を出しました。これが僕の観光に関する考察の原点であり、その後の講義のベースにもなっています。目次(図2)をチェックすれば、観光の構造を考える上で本質的なものがそろっているはず。冒頭の「1 観光活動の社会的背景」や「2 だれが観光旅行をしているか」の部分では、一人あたりの所得及び個人消費支出の推移などを説得力あるデータで示しましたが、全体としてはフォトエッセー風で「美しくないと観光地は人が来ない」ということを写真に語らせました。

つという方針で育ててきました。その人材が、社会及び個人にとって意義あることをやっていると思える環境を整えることにも注意したつもりです。

「学」とは「知の体系化」です。観光は後発の学問かつ広汎で、その体系化は簡単ではありませんが、「観光学」という分野として立ち行くためには、経済学や文学、心理学など他の分野から学びながら、概念(観光とは何か)と意味論(観光にどのような効用があるか)を確立しなければなりません。その上で人材育成のための良い教科書をつくることは、これから財団が主体的に取り組まなければならない仕事だと思えます。

**「観光」が
目指すべきもの**

人間の好奇心や探究心に
「喜び」や「生きがい」に資する

——これから「観光」が目指すべきことは、何でしょうか。



白板を活用してインタビューに応える鈴木忠義氏

鈴木忠義(すずき ただよし)

東京大学、東京工業大学、東京農業大学にて教鞭を執る。観光開発・景観工学・地域開発を関連づけて研究する。(株)世田谷川場ふるさと公社社長として35年間にわたって交流事業を推進。公益財団法人日本交通公社専門委員、理事、評議員(現在)として約50年にわたり指導。大正13年東京生まれ。

【鈴木】小さい子供がバスや電車に乗るとすぐに窓の外を見たがりです。その好奇心や探究心は「観光」の原点に通じるものがあります。人間が本来持つ好奇心や探究心に応え、人間の「喜び」や「生きがい」に資することが「観光」の本質だと考えます。人間の生活には経済基盤がないと困りますが、経済はあくまでも手段であって、真に求めているのは「喜び」や「生きがい」なのです。心理学の対象はノイローゼや精神疾患などネガティブな要素のことが多くて、ポジティブな要素である「喜び」に関する部分は十七分の一(約六%)しかないといわれています(注4)。観光とはま

さにその貴重な部分を担わせてもらっていることを認識して、「喜びの心理学」の基礎研究も必要でしょう。——「喜び」や「生きがい」というのは人間が「観光」に求める普遍的なものですね。一方で、「観光」の対象は時代によって大きく変わってきていきますよね。

【鈴木】まさにそうなのです。「観光」の対象が変わるといことは、前述の観光の概念と意味(効用)論も時代によって変わっていくということなのです。だから、観光に携わる人々は変化を前提として研鑽を積み、普遍的な部分は大切にしながらもみんな

が納得できる説明ができるように努めないといけません。

また、「観光」に求める意味(効用)は、主体によっても異なりますので主体別に考えることも大切です。私は常々三つの主体で考えています。第一主体は観光客、第二主体は地域(住民+行政)、第三主体はその他の観光関係者で、財団のような専門家は第三主体に含まれます。第三主体の人には、第一主体と第二主体が求めることを十分踏まえた上で、近江商人の商道徳である「売り手よし、買い手よし、世の中よし」ならぬ「三方よし」を求めてより良い方向性を提案していくことが、これから益々求められるでしょう。

「喜び」や「生きがい」の創出に資する「観光地づくり」とは

観光地づくりは

演劇や音楽のような「時間芸術」

——ここからは、人間の本质である「喜び」や「生きがい」を追求する「観

光地づくり」について考えを聞かせてください。

【鈴木】人間の「喜び」や「生きがい」を追求するというのは、演劇や音楽のような「時間芸術」と同様なので、置き換えて考えてみると面白いです(図3)。「どういう舞台にするか」ということは「どういう観光地にするか」ということになります。舞台上で、「観光客(第一主体)」に「地域(住民+行政)(第二主体)」と共に「役者」としての役割を担ってもらうことが求められます。そのためには、「稽古」をしてもらわなければなりません。それは、「観光客」にとっては感動できるように日々自分を磨くこと、「地域」にとっては「観光客」と自らが「喜び」を感じられるよう技と価値観を高めることです。

そして、良い舞台には良い大道具・小道具が欠かせないように、「大道具」としての「地域」が有する観光資源(自然・歴史・文化)がベースになって、「小道具」としての「観光魅力」を創出するための取組みも生きてくるのです。「小道具」だけを考えていてはいけません。また、あ

図3 「観光地づくり」構成要素～演劇要素との対比から

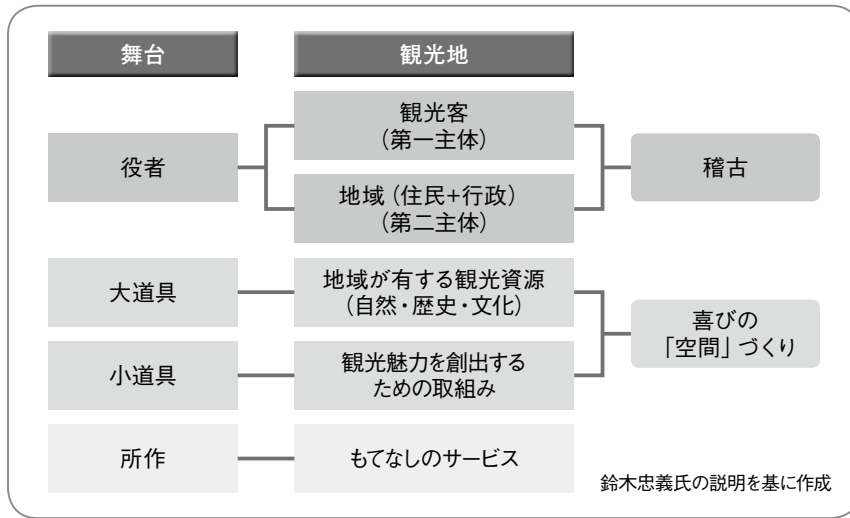
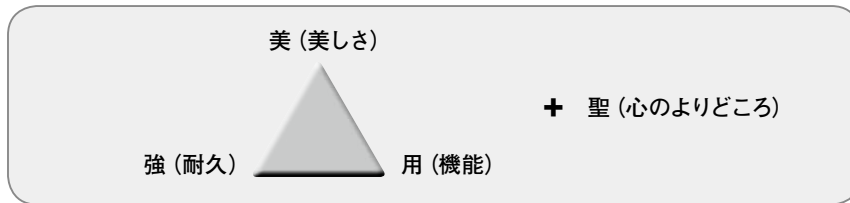


図4 観光魅力を創出する時に考えるべき要素



出典：財団法人日本交通公社「平成14～17年度 観光基礎講座 鈴木忠義氏レジュメ」

らゆるものについて「所作」としての「もてなしのサービス」がきちんとしていないと、「役者」も「大道具」も「小道具」も生きてはきません。その上で、「時間芸術」なので、時間要素を加味してどういう順序で組み立てて見せていくかも重要です。

——観光地づくりのベースになる「大道具」としての「地域が有する観光資源（自然・歴史・文化）」を考える時に、気をつけるべきことは何ですか。

【鈴木】肖像画は背景で描くともいうように、背景が悪いと良い舞台はで

きないということを意識しておかねばなりません。特に、日本の田園風景は、人の手が入ることでの魅力を持っています。地域のみんなが取り組まないと成り立ちません。そうやってみんなで手をかけて地域の風景とその基盤にある生業を守っていくことが「まちづくり」であり、それを目の当たりにすることは、そこで育つ子供たちの教育や躰しづにもつながります。

——「大道具」を踏まえながら、舞台にいろいろな「小道具」としての「観光魅力を創出するための取り組み」をしつらえるにあたっては、どのような考え方が大切ですか。

【鈴木】やはり古代ローマの時代からいわれている「用・強・美」の三位一体と「聖」が人間の文明・文化をつくってきたのだから、それが基本です（図4）。「用」は機能を満たし役に立つこと。「強」は安全で丈夫で長持ちすること。そして、美しくないとはいけません。「聖」は、演劇への置き換えでは主に「大道具」に相当する部分となりますが、「小道具」

具」をしつらえていく時に尊重しなければなりません。鎮守の森や東京の飛鳥山などを思い浮かべてもらえたら分かると思いますが、地域の人にとって「心のよりどころ」であり、観光客をも惹ひきつける大切な場なのです。

「観光人」は感受性と先見性を持った「目利き」であれ

——「観光地づくり」に携わる人間はどうあるべきでしょうか。

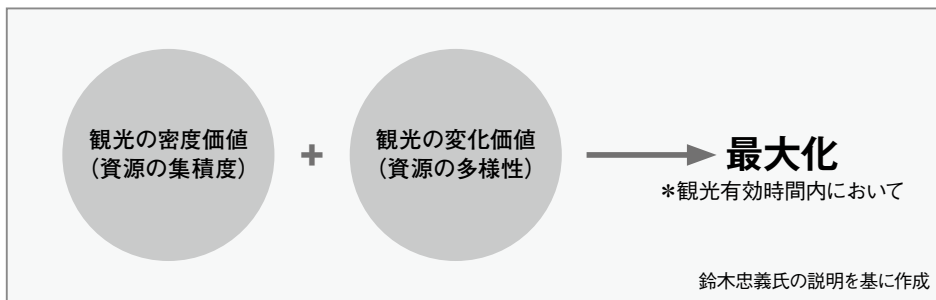
【鈴木】人間は常に「イノベーション」を追求し、文明の力を享受しながら生活を豊かにしていこうという生き物なので、観光に携わる「観光人」（第三主体）には感受性と先見性が必須です。一方で古いものや良いものの中に「聖」を見分けることができなければなりません。すなわち本質を見抜く高度なセンスを持った「目利き」でなければならぬのです。広く見聞して、その地域では「何が人間の『喜び』につながるのか」「何が『生きがい』となりうるのか」を的確に捉え、「観光地づくり」につ

なげていかなければなりません。

——その秘訣は何でしょうか？

【鈴木】「観光地づくり」では、人間の子どもを育てるのと同じようにその

図5 観光の密度価値と変化価値



最大化

*観光有効時間内において

鈴木忠義氏の説明を基に作成

地域の固有の素質、良いところを伸ばしてあげることがまず大切です。

観光では、観光客がわざわざ「時間」と「お金」をかけて来訪するだけの

価値が地域にあるかどうかという観点から考えます。一日二十四時間のうち観光有効時間はおよそ八時間。

この時間内において観光の「密度価値(資源の集積度)」と「変化価値(資源の多様性)」(図5)を最大化させるために、どう創り上げていくかということなのです。

概念を共有し、行動を一貫させ、住民の「喜び」や「生きがい」につなげる

——例えば、長年にわたって現場で指導している川場村(群馬県)ではどのように進めてきたのでしょうか。

【鈴木】川場村とは世田谷区の区民健康村づくり事業「第二のふるさと」構想の場所選定で川場村に決める前からの関わりで、三十五年になります。「わが村、わが庭」を合言葉に「健康で幸せに長生きしよう」と言い続けています。堅い言葉で言

えば概念を共有し、一貫した行動をしていくということです。どのような考え方で、何に価値を置くかを明確にして、関係者みんなが共有することが大切です、それを一丸となって行動に移していけば長続きするのです。時間はかかりますが、迎える住民も納得して観光客を迎えることができるようになりますので、良いおもてなしにつながります。「人とのつながり」の楽しさを実感し、それが来訪者と住民の「喜び」や「生きがい」となり、次のエネルギーにつながっていくのです。人が地域に訪してくれるというのは素晴らしいことで、人だけでなく、お金も物も情報も入ってきて、新しい仕組みも生まれるのです。

——三十五年の間となると関わる人も変わると思いますが、続ける要因は何でしょうか？

【鈴木】まず経済的にうまくいっているということがあります。また、農作物等を介して観光客との交流が生まれ、それが住民の「喜び」や「生きがい」につながっていることも大きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

——「喜びの空間づくり」とは、どのようにしていったらよいのでしょうか。

【鈴木】「づくり」という言葉には空間なり資源なりをうまく運用していくソフトも含まれ、ソフトとハードが相互に関係し合いながら混然一体として魅力的な「場」をつくっていくことを意味します。例えば、造園関係の人には「飛び出せ造園」といっていますが、「園」の中にとどまらず、人間が生活する空間全体を対

きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

——「喜びの空間づくり」とは、どのようにしていったらよいのでしょうか。

【鈴木】「づくり」という言葉には空間なり資源なりをうまく運用していくソフトも含まれ、ソフトとハードが相互に関係し合いながら混然一体として魅力的な「場」をつくっていくことを意味します。例えば、造園関係の人には「飛び出せ造園」といっていますが、「園」の中にとどまらず、人間が生活する空間全体を対

きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

——「喜びの空間づくり」とは、どのようにしていったらよいのでしょうか。

【鈴木】「づくり」という言葉には空間なり資源なりをうまく運用していくソフトも含まれ、ソフトとハードが相互に関係し合いながら混然一体として魅力的な「場」をつくっていくことを意味します。例えば、造園関係の人には「飛び出せ造園」といっていますが、「園」の中にとどまらず、人間が生活する空間全体を対

きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

——「喜びの空間づくり」とは、どのようにしていったらよいのでしょうか。

【鈴木】「づくり」という言葉には空間なり資源なりをうまく運用していくソフトも含まれ、ソフトとハードが相互に関係し合いながら混然一体として魅力的な「場」をつくっていくことを意味します。例えば、造園関係の人には「飛び出せ造園」といっていますが、「園」の中にとどまらず、人間が生活する空間全体を対

きいと思います。物まねや付け焼き刃ではなく、「川場村ならではの価値」を地域の人々と一緒に追求してきました。そして、今一番の課題は滞留時間を延ばすことです。二時間滞留すれば必ず飲食するので経済効果が出てきますし、観光客と住民との接点、交流も増えて相互に「喜び」や「生きがい」も増すのです。そのためには、川場村では歩いて楽しめる路傍の景観づくりとして、村の各所に「喜びの空間」をつくっていかうと話しています。

観光はまちづくりの総仕上げ

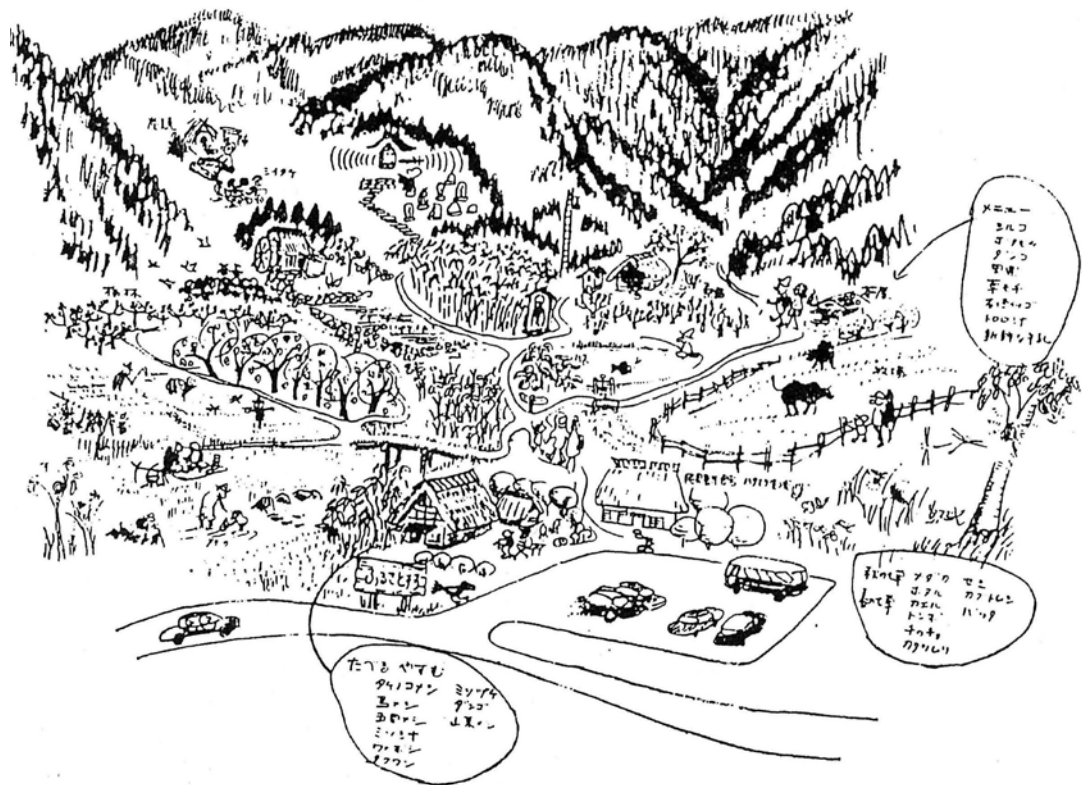


図6 鈴木忠義氏が中山間地において35年にわたり愛用している童謡唱歌をモチーフとした「喜びの空間」のイラスト(大橋清二氏・画)

象にして伝統的な造園技術を応用して「場」を創造することが必要という意味です。また、川場村のように史跡が乏しいところは各地にありますが、そのような地域ほど生活文化の魅力を高めていくことが求められます。生活の基本的な要素である「衣・食・住」について、文化を構成する「学問・芸術・教育」という観点から考えて質を高めていくということなのです。それがまちづくり、村づくりの母体になります。一見足りないと思われるものも地域の創意工夫で補えるものなのです。

そうやって、まちづくり、村づくりをきちんとやって「喜びの空間」をつくっていく、最終的には地域の生活文化を向上させていくことが一番大切なのです。それこそが外の人を惹きつけ、地域の人にも観光客にも「喜び」と「生きがい」を生む息の長い「観光地づくり」につながるのです。

(すずき ただよし)

聞き手・研究調査部 梅川智也

石山千代

*二〇二二年七月二日(月)、八月六日(月)のインタビューを基に構成

〈参考〉

鈴木忠義氏の考え方を端的に表現したレジュメを紹介します。

地域に生活している人々が、発見の喜び・創造の喜び・守る喜び・参加の喜び(これらは生きがい感)に浸りつつ、地域を美しく磨き上げていくとき、他の地域から多くの人々(観光客)がその「光」を「観に」訪れる。これにより観光は成立する。そのとき多岐にわたり、相互に社会的、経済的な効果が発生する。

出典：財団法人日本交通公社「平成17年度観光実践講座 鈴木忠義氏レジュメ(はじめに)」

(注1) 田村剛(二八九〇～一九七九) 林学博士。

日本の造園学の確立、国立公園、海中公園制度の確立に尽力。『造園概論』(一九一八)等。

(注2) 石川栄耀(二八九三～一九五五) 東京都建設局長を務め、日本都市計画学会の設立に深く関与。『都市計画及び国土計画』(一九四二)等。

(注3) 加藤誠平(一九〇六～一九六九) 東京大学農学部林学科名誉教授(森林利用学)。「橋梁美学」(一九三〇)、鈴木忠義との共著「観光道路」(一九五五)等。上高地の二代目河童橋の景観設計。

(注4) 参考：『感情力』(フランソワ・ルロール、クリストフ・アンドレ共著、高野優訳、紀伊國屋書店、二〇〇五)

観光とまちづくりの間にあるもの

—— 由布院の四十年の足跡から見えること

2

愛媛大学法文学部総合政策学科講師
元由布院観光総合事務所事務局長

米田 誠司

本号の特集テーマは「観光まちづくりの『心』とは」である。由布院が観光まちづくりの先進事例であるといわれることがあるが、本稿ではそうしたスタンスはまずとっていない。なぜなら、由布院だけが特別な存在であるわけではなく、今も多くの課題を抱えながら現在進行形で観光まちづくりを実践している地域の一つにすぎないからである。ただ由布院という地域だけが経験してきたことも数多く、そうした足跡をたどりながら、

・由布院は観光地を志向してきたのか
・由布院の観光まちづくりの旗印は何か

・いま由布院の観光まちづくりはどうなっているのか

これら三つの観点から、観光まちづくりの核心に迫ってみたい。

由布院は観光地を志向してきたのか

観光まちづくりを考えてゆく前提として、由布院がこれまで観光地を志向してきたのかということについてまず考えてみたい。この四十年間だけで見ても、三十数軒しかなかった宿泊施設が百三十軒以上に増え、観光客数も百万人から四百万

人近くが増えていく。このことからすれば、観光地として大きく成長してきたのは明らかであるが、でもそもそも由布院は観光地を志向してきたのであろうか。

例えば、由布院の観光まちづくりにおいてエポックメイキングであった「明日の由布院を考える会」では、

『花水樹』という雑誌を地域住民自ら（創刊時は「由布院の自然を守る会」（写真1）が編集し一九七〇年から発刊してきた。その創刊号のなかで企画担当の中

谷健太郎氏は、「由布院の町がどんな産業を持ち、どんな文化を形成しているか」ということは、すなわち私たち由布院に住む者が、あなたが、私が、どんな産業を望み、どんな家に住みたいと思いい、どんな食べ物を美味しいと感じ、どんな生き方を好ましいと考えるか、要するに私たちがどのように生きるかにかかっていると思うのです。そういう町民全体の真剣な意思が積み重ねられ、みがきぬかれ、ひとつの具体的な指向を持ち始めた時、はじめてそれが行政という機関を通して実現するのです。鯨のような果敢な動物でも潮がなければ泳げません。どんな有能な行政者でも、民意という文化の海が豊か

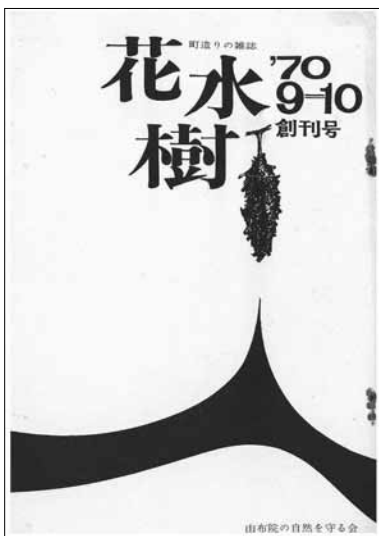


写真1 『花水樹』創刊号の表紙

に拡がっていなければ充分の航行はできないのです。そしてこの『花水樹』という雑誌はその海を造るために発行されるものです。」と述べている。この「民意という文化の海」という言葉は、自分たちが日々暮らす地域を正面から捉え、観光業に限らず多くの職業を持った住民の手で地域をつくっていくという意思を表したものであり、観光地としてだけ発展させるという意図をこの段階でまず持っていないかった。

出会いや交流の場として

またバブル経済による大型開発の波にさらされていた一九九〇年が由布院にとつて節目の年であるが、この年、湯布院町は開発抑制と成長の管理を謳った「潤いのある町づくり条例」を制定し、由布院温泉観光協会と由布院温泉旅館組合は観光まちづくりの拠点として由布院観光総合事務所を設立した。湯布院町はこの条例の基本理念で「美しい自然環境、魅力ある景観、良好な生活環境は湯布院町のかげがえのない資産である」としており、同年の観

光協会のスローガンは「花咲かせるよりも、根を肥らせよう」であり、ビジョンも「市場（バザール）のある温泉リゾート村」であった。この当時、由布院という地域そのものの価値を前面に打ち出しながら、その上で市場（バザール）のように人やモノが出会い、交流できる場を目指していたのである。さらに二〇一二年の観光協会の事業計画の柱では、「由布院盆地の観光文化を尊び、生業の見えるまちへ」となっている。

このように、この四十年にわたって単に観光地を志向するのではなく、自分たちが暮らす町の持つ価値をまず認識し、そのことを踏まえた上で住みよい町をつくり、そして出会いや交流の場としての観光まちづくりを実践してきたといえるだろう。

地域における生業の必要性

さらにここで二つの点について触れておきたい。一つは、由布院が独自の価値を守りながらも、地域で生きゆく術としてあるいは手段として「生業」が必要であることを明確に示していることである。地域そのもの

のをよくしていこうという意思は貫かれていたが、その地域を閉じたものにせず、でも観光を目的化せず、あくまでも大切な生業として観光を考えていこうという姿勢である。こうして地域の暮らしを前提とするため、過去において外部からの大型開発計画に対して町を挙げて反対運動を展開してきたことも、自分たちの暮らしや生業と相いれない規模の経済が地域に入ってくることをよしとしてこなかったからである。

そしてもう一つは、地域イコール自治体ではないと認識してきたことである。あくまでも住民の真剣な意思が積み重なって民意が形成されることや住民自身の活動が重要であり、それを踏まえて行政が自治体運営すると認識されてきたことは、今後の観光まちづくりを考える上で大切な視点である。言い換えれば、公とは何かということでもある。

由布院の観光まちづくりの旗印は何か

まずこの四十年について振り返

つてみたが、由布院の観光まちづくりの起源はさらにさかのぼって、一九二四年に行われた東京帝国大学の本多静六博士による「由布院温泉発展策」という講演に端を発する。わが国で最初の林学博士である本多博士は、この講演のなかで、

「町の中に公園をつくらず、公園の中に町があるようにすること」

「杉や檜などの針葉樹ばかりでなく、紅葉や山桜などの広葉樹も交ぜて森林を形成すること」

「金鱗湖は由布院盆地の中心となる景色のよいところであるから、完全な設計ができるまで手をつけないうこと」

などと具体的に述べており、さらに「ドイツのバーデン・バーデンのように森林が美しく整備され、温泉保養施設や劇場を備えた滞在型の町」を目指すよう提言している。

ドイツの滞在型

温泉保養地に学ぶ

この講演から戦争を挟んで三十五年後の一九六九年に初代湯布院町長である岩男頼一氏が、そしてその二

年後の一九七一年に前述の中谷健太郎氏、溝口薫平氏、志手康二氏の三氏がバーデン・バーデンを訪ねた。またドイツ各地の温泉保養地を視察した三氏は、中でもバーデン・ヴァイラーで「緑・空間・静けさ」の重要性を感じ、現地に学ぶとともに由布院の資源と可能性に気づいて戻り、由布院の観光まちづくりの活動は深化していった。またこの研修旅行のなかから、滞在型保養温泉地として「クアオルト構想」(注)がその後湯布院町の施策としても位置づけられた。そして、「由布院は大きくなることを追いかけることをやめて、小さいままの豊かさを追いかけよう。主役は地域である。」ということが提唱されたが、これこそが一九七一年に掲げられた由布院の観光まちづくりの旗印である。八十八年前に由来し四十一年前に掲げられた旗印が由布院の観光まちづくりの背骨を構成しており、二〇〇一年から六年かけて由布院温泉観光協会が若手後継者への世代交代が図られたが、この旗印は彼らによって今でも明確に掲げ続けられている。

人 コラム

由布院温泉の人々「自分の言葉」で語り、つながって、夢に近づく

桑野 和泉氏 株式会社玉の湯 代表取締役社長 由布院温泉観光協会長



自分の町について自分の言葉で語れることが由布院人の特徴かもしれません。人に語ることで気づきがありますし、語るとなると昔の自分の夢とかを思い出して未来に近づけていく話をします。立派なことを言っているからだんだん恥ずかしくなってくるから自分のなかでちゃんとしてくるのです。

聞いてくださる方がいらっしゃるおかげでもあり、由布院は外の方とつながりのなかで人が育ちやすい環境だと思えます。映画を始めとしてどの分野でも「目利き」がいて、そのことがまちの信頼にもなっています。地域内だけでずつとやっていると、外からの方をお迎えするなかなので、まちの人たちがいろいろな意味でつながり、自分たちに責任が伴う「ちょっと先の未来」を目指して新たなものを生み出していきます。例えば花籠で町を飾るとなると普段は一緒にすることの少ない鉄工所や花屋さんが一緒に作業をします。そこには観光業という壁はなく「地域」そのものなのです。由布院というステージを求めて新しい人たちも入ってきていますが、金鱗湖の清掃となると急な連絡でもたくさんが参加して一緒に作業をします。

まだ出番を待っている人がいると思います。その最たるものが女性です。女性の役割は、日本の観光地づくりのなかではまだ見えてきていません。地域のなかで女性たちがさまざまなステージを持ち活躍することによって、外の方々を迎える観光まちづくりに欠かせない女性や子供の目線が入って時間と空間の質の向上につなげていきます。私自身の活動の源も、地域のなかで子供たちが安全で安心に育つ環境、女性が働きやすい環境をつくりたいということにありましたので、これからはその夢をより現実近づけていけたらなと思っています。

(くわの いずみ)

(二〇二二年八月三十一日談)

聞き手…梅川智也・石山千代

いま由布院の 観光まちづくりは どうなっているのか

この話題に入る前に、由布院における人々の関係性について少し触れておきたい。前述の三氏のリーダーシップは由布院の観光まちづくりの方向性を指し示す上で大きな役割を果たしたが、と同時に、リーダーを取り巻く地域のメンバーが発揮したフォロワーシップも重要であった。

例えば由布院では、人口二万人規模の地域と思えないほど数多くの取り組みやイベントが行われているが、そこでは「この指とまれ方式」が採用されている。ある事業を行う時、そのテーマに関して最も能力と情熱を持っていると思われる人物をそのテーマのリーダーに担ぐことで、その人物の能力を遺憾なく発揮させてきた。またその際に周囲のメンバーは、そのテーマに関してフォロワーシップを発揮してリーダーを支えて進むことができたのである。そうした仕組みが重層的にあるいは多面的に展開され、まさにソーシャルキャ

ピタルとでもいうべき地域内に網目状にまちづくりのネットワークが展開されてきた。一方で地域のなかにはさまざまな議論や対立も巻き起しているが、そうした時、対立を恐れず意見を闘わせてきたのも由布院の人々である。しかもそうした対立の根底には地域における信頼関係が存在するという「対立的信頼関係」という概念も中谷氏によって提唱され、実践されてきた。また古くから公民館活動が湯布院町で盛んであったことや移住者もまちづくり活動に参画していることも、由布院の観光まちづくりに厚みを与えている(写真2)。



写真2 由布院で観光まちづくりを実践する皆さん

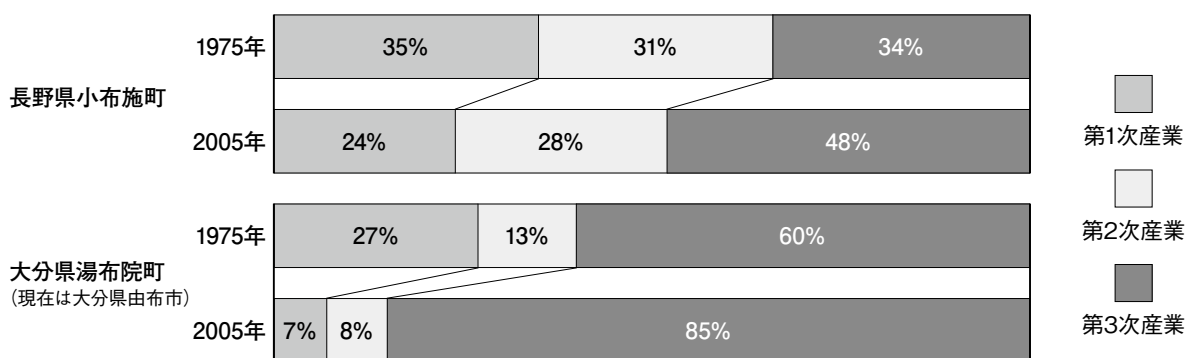
観光まちづくりに不可欠な

第1次・第2次産業

ただここへきて、由布院の観光まちづくりも大きな岐路に立たされている。まず観光客数が近年落ち込んでいる。また湯布院町における産業別就業者数の構成比をこの三十年で比較しても、例えば同規模の町である長野県小布施町が、果樹を中心とした農業と菓子製造業や酒造業、サービス業をバランスよく維持してきたのに対して、湯布院町では、サービス業が主産業であるものの、それだけが大きく突出した偏った産業構成になってしまった(図1)。

さらに第1次産業としても、地域の景観形成においても、中心部の水田が重要な役割を担っているが、そうした水田がスプロールされる宅地化が続いている。また一九九八年からゆふいん料理研究会加盟の旅館や農家により野菜の地場流通が実践され、旅館組合で由布院盆地の米を一定の価額で買い上げる「盆地米プロジェクト」(写真3)も行われているが、農業・農村を守っていく抜本的な対策が今こそ必要である。一方

図1 産業別就業者数の構成比の比較



(昭和50年・平成17年国勢調査による)

写真3 由布岳を望む田園風景



で一九七〇年当時のように、観光業に限らず住民で手を携えてまちづくりに取り組む機会や一緒に学んでいく場面が減っていたが、今夏に発生した水害の災害復旧や、ひと夏続いたゆふいんの森号の災害運休の運転再開にあたっては、地域を挙げた取り組みが行われ、由布院の底力はいまだ健在である。

観光とまちづくりの 間にあるもの

ここまで由布院の観光まちづくり

の足跡を見てきたが、最後に観光まちづくりの課題と可能性について考えてみたい。まず観光地に限らず、地域住民によるまちづくりの動きも近年盛んになってきた。またそうした普通の町のまちづくりも、イベントやガイドなど、地域住民だけでなく来訪者も意識して行われることが多くなった。要は普通の町も地域を開き始めたのである。さらに言えば、地域でまちづくりをすることは当たり前になっており、しかもそのレベルは加速度的に上がってきている。第一の課題は、観光地の観光まちづくりのレベルが、果たしてそうしたまちづくりのレベルに比肩しているのかということである。

また次の課題として、観光まちづくりそのものが、そろそろ次のステージを目指すべき時にきているのではないだろうか。観光とまちづくりを相反するものとして考えるのではなく、長くて数日しか地域にいない観光と、ずっと地域に定住して行うまちづくりの間に、さまざまな可能性があることも見ていきたい。例えば、一〜三週間程度の「滞在」がこ

れからの旅の一つの柱になっていく可能性が あることや、一〜三カ月程度「短期居住」する人々が、新たにまちづくりの担い手になるようなことまで想定できるかということだ。またそのように位置づけてみた時、観光自体は生業として、また地域の生業を束ねた大事な産業として、もっと明快な産業政策と再投資財源を持つべきであろう。

さらにその政策形成と実行の担い手は、自治体や業界だけでなく、地域のなかでのさまざまな主体が参画できる場が設けられるべきであり、また地域はそこに住む住民だけで構成されるものではなく、地域で生業を営む企業も大事な主体であり、住民参加もするが、企業も参加し、そして行政参加できるように場を指したい。そうすると、それぞれの地域がどう「地域経営」していくのかが大切な観点となり、そうした場こそ「公」と呼べるものになるのではないだろうか。そしてさらに「滞在者」や「短期居住者」も観光まちづくりの担い手になり得るとすれば、「地域自治」は新たな局面を迎

えることとなる。

最後に、観光まちづくりにおいて、よって立つ地域をどの範囲で設定するのかということを考えてみたい。市町村合併が進み、道州制が叫ばれているように、多くの地域は自治体の規模を大きくすることばかりが目に向いているが、観光まちづくりの地域の範囲はより小さく捉えて、地域が一番光り輝く範囲を単位とすべきであろう。そして地域性や取り組みの内容に応じて、それらが連合しあるいは重層的に構成されるような、ダイナミックな仕組みや方向性を考えていくことが、これからの観光まちづくりに必要なのではないだろうか。

(よねだ せいじ)

(注) クアオルト構想：温泉、芸術文化、自然環境といった生活環境を整え、住民の暮らしをより充実したものにしながら、地域に来訪者を迎え、ともに健康増進に取り組むことができる滞在型保養温泉地を目指していく構想。

米田誠司 (よねだ せいじ)

一九六三年福岡県生まれ。早稲田大学大学院修士課程修了後、東京都庁入庁。多摩ニュータウン開発などを手掛ける。その後、由布院観光事務所事務局長の全国公募で由布院温泉へ。昨年、熊本大学大学院博士課程を修了し、現職に至る。

「泉質主義」を貫き、時代を紡ぐ 草津温泉

——次世代へのバトンタッチが責務

草津温泉旅館協同組合理事長

黒岩 裕喜男

3

「歩み入る者にやすらぎを、

去りゆく人にしあわせを」

これは、昭和五十四年に制定された、草津町の町民憲章です。この言葉は草津温泉をよく訪れていた東山魁夷画伯がドイツ・ローテンブルク市の城壁の門に刻まれているラテン語を翻訳し、当町へ贈ってくれたものです。中世の城塞都市で使われた意味合いとは、多少ニュアンスが違いかもありませんが、観光業が経済の大きな支柱である草津温泉にとって、非常にシンプルで、あるべき理

念を言い表していると感じます。草津町の歴代町長もみな、この町民憲章の言葉に深く共感し、時に言葉の意味を再確認しながら、施策の基本理念においてきました。

草津町の概況

面積約五十平方キロメートル、約七〇%が上信越高原国立公園内に位置しています。平均標高千二百メートル。年間平均気温七℃、夏季（七月～九月）十八℃。人口約七千五百人。入込客数約二百八十万、宿泊客数百八十万。人口は、昭和五十年代

の約九千五百人をピークに減少し、過疎化傾向にあります。就労人口を合わせると九千人以上になり、労働力に関しては、人口が流失した分を近隣からの就労と短期の住み込みによる雇用によって賄っている状況です。入込客数は、平成六年と十七年の約三百万人が最も多く、昭和六十年代は二百五十万人、その後増減があり、昨年は二百七十万人となり、近年の七～八年間はピーク時より約一割減少。宿泊客数も同様に平成十年代中ごろの二百万人より約一割の減少となっています。宿泊施設数は、旅館組合会員数百十軒、他ペンション・

民宿を加えると、約百五十軒になります。概算ではありますが、宿泊施設の収容総数が約二万五千人とされているので、昨年の百八十万人で割ると、定員稼働率、約三三%となります。ただし、この数字には寮、保養所、リゾートマンションの宿泊は含まれていないので、実際には、宿泊人員はもっと多いと考えられます。

草津温泉の歴史

―ベルツ博士の功績

草津温泉の始まりについて、この土地にもよくあるように、古くからの言い伝えはいくつもありませんが、史実として残っているのは、一九三三年に源頼朝が温泉に入浴に訪れた、という記録からです。その後戦国期には多くの武将や文人が訪れるようになりました。実際に温泉地として確立するのは、江戸期に入り、幕府直轄の天領となってからでした。政局が安定し、「天下泰平」の世になって、庶民生活・文化の発達により来浴客が年間二十万人を超えるようになったのです。

・明治時代

明治期に入り、東京医学校（現、東京大学医学部）で教鞭をとり、明治天皇・大正天皇の侍医でもあったドイツ人医学者のベルツ博士（写真）が明治十一年に初めて草津を訪れました。ベルツ博士は、草津温泉の量、質、自然環境の良さ、そして長年培われてきた入浴法や温泉療法に注目し、その後しばしば訪れました。そして、泉質や「時間湯」と呼ばれる草津独特の入浴法の効能などを



写真1 エルヴィン・フォン・ベルツ博士
（草津ベルツ記念館所蔵）

科学的に調査・分析し、草津温泉の医学的有効性を評価しました。その結果を基に温泉の効能を生かす入浴法についての指導も行ったのです。

ベルツ博士は、「草津には、無比の温泉以外に日本で最上の山の空気と、全く理想的な飲料水がある」「もしこんな土地がヨーロッパにあったとしたら、カルロヴィ・ヴァリ（チエコにある温泉）よりもにぎわうことだろう」と称賛し、素晴らしい温泉保養地として、広く世界に紹介しました。また、当時の町の有識者たちにもヨーロッパの温泉保養地を紹介し、そのように発展させる方法も指導しました。町としてすぐにそのような開発や変革に着手したわけではありませんが、今で言う「リゾート」の概念が初めて導入された大きな転換期でした。

・大正から昭和へ

その後、大正初年のスキー導入、信越本線開通による物流、そして、いち早く観光客の輸送を目的にした草軽電鉄（草津〜軽井沢間）の開設（大正十五年全線開通）など。また、戦後間もない昭和二十三年の日本で最初の邦人用スキーリフトの架設など、草津が温泉保養地として発展していった根幹には、ベルツ博士によってもたらされた概念が脈々と受け継がれていたと思います。

・戦後から現在へ

そして、戦後の経済成長期の国民的レジャーブームによる観光客の激増、宿泊施設の大規模化、団体客時代の到来、リゾートマンション乱開発の時代、旅行形態の多様化、平成以降の長引く不況、またはその常態

化等、めまぐるしく変わる時代の変遷のなか、他の多くの観光地と同様、苦しみながらも、さまざまな対応に迫られながら、現在に至っています。

草津温泉・近年の観光地づくりの取り組み

『草津温泉ファッションアップ計画』 （平成九〜十二年）

平成初年以降バブル経済の崩壊による低迷期が続くなか、もう一度観光地としての魅力に磨きをかけ直そうと、観光協会の主導のもとに財団法人日本交通公社とともに取り組みました。この計画は、当時結成されて間もなかった旅館組合の女将の会（現、湯の華会）や、商工会・旅館組合両青年部が新たに将来に向けて行動を開始できるような勉強会、検討会の開催など、計画の策定の過程を重視したものでした。第一年次には、計画に携わるメンバーが共通認識できる目標として、「もう一泊したくなる、草津温泉」を設定。第二年次には、ベルツ博士が提唱し



る各イベントを見直し、今後の課題を検討して、その結果を各イベント主催者に提案。さらに、自らも積極的に関わっていくという機運も生まれました。折しも、当時、開催が迫っていた日韓共催のサッカー・ワールドカップのキャンペーンへの立候補という大きなプロジェクトにも挑戦しました。この取り組みは、参加国との調整がつかず、誘致の成功には至りませんでした。スポーツのできる温泉地としての認知度アップにつながりました。実際、その活動を通して、当時草津の旅館や飲食店で働きながら群馬県社会人リーグに参加していた選手たちと交流ができ、それが日本サッカー協会の目にとまり、これが温泉地発として全国的にも例を見ない、Jリーグチーム「ザスパ草津」の誕生へと発展することになったのです。また、そのザスパ草津の誕生に伴い、町によるグラウンド整備が進み、それまでも催されていたサッカー大会の参加者も増加し、今では、少年・少女・女子・学生等の大会数も増え、七、八月の二カ月間に約二万五千人を集客するに至っています。

人コラム

草津温泉の人々へベルツマインドを伝え続けていく

市川 薫氏 ホテル二井 女将・湯の華会初代会長

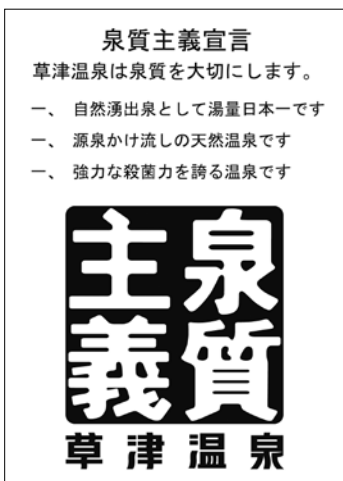


いまの日本人は人間関係が希薄になっていきますが、草津は濃いのです。昔、隣の子を叱ったのに近いものが残っています。お互いルーツも分かっていて普通なら放っておくことを言ってくれるのはありがたいものです。また、草津の人は国際的です。山の中の七千人の小さな町ですが姉妹都市が五つあり五十年にわたる交流を続けていますし、草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティヴァルも

三十三回目になります。たとえ言葉が通じなくとも、コミュニケーションが成り立つところがすごいのです。そして、外から見た草津の良さを実感して、子供たちに伝えてきました。これはベルツ博士(注)に由来すると思っています。明治時代の草津町民にとっては、温泉はあつて当たり前でしたが、博士は何度も草津に来てくれて長い時は一カ月くらい逗留(とまり)して、おいしい水と澄んだ空気、温泉は天与の恵みで大切にすべきということを感じさせてくれました。そして、町民はベルツマインドを脈々と伝え、明治以降少しずつ形にしてみました。その現在の象徴が「泉質主義」です。温泉に軸があるから何をするにもぶれません。町長が変わる

うともバトンタッチをして、湯畑を守り守られながらやってきました。温泉への感謝と謙虚さが原点です。ヨーロッパには四百年たっても未完成な教会がありますが「文化は未完成であるべきで、次の世代にも未完成のものを伝え、人類が続く限りそれが続いていくことで伝わる」と聞いてなるほどと思いました。そういうことを草津の人は海外に行きどこかで学んでいて、そのような感覚ができているのかもしれない。湯畑も常に動いていて未来永劫(えいごう)未完成。だから、次にテーマをつくって取り組み、伝え続けていけるのです。

(いちかわ かおる)
聞き手・梅川智也・石山千代
(二〇二二年七月二十四日談)



さまざまな効果をもたらしたブラッシュアップ計画でしたが、三年間を通しての一番の収穫は、それまで団体ごとに行われていた、地域の活性化やその取り組み・イベントなどに、どこが主催であれ、観光協会、旅館組合、商工会、行政、議会までも、草津が一体となって取り組むようになったことだと考えています。

・『草津の冬を考える会』
(平成十三年度)

ブラッシュアップ計画にも一区切りつくと、今度はJTB旅館ホテル連盟の草津地区会が主体となって財団法人日本交通公社とともに取り組んだのが、「草津の冬を考える会」でした。これは、スキー需要の低迷・

激減に伴い、年間の最オフ期になった冬(十二月二月)の誘客を何とかしようと始まった会です。メンバーはJTB旅ホ連の他に各団体の任意のメンバーで話し合いを重ねました。しかし、なかなか「冬を売る、冬が売れる」ような効果的なアイデアがまとまらず、最終的に「草津は季節を問わず、売りは温泉そのもの」という原点回帰的なごくシンプルなものになりました。「それでは、我々自身ももう一度草津の温泉について勉強し直し、泉質や効能、入浴法など町民のだれもが胸を張って観光客またはそれを知らない人に説明できるようにしよう」という考えから、平成十三年十二月には、「泉質主義」を宣言(図2)。草津の温泉についての冊子を五連で作し、誇れる「泉質」の良さを訴求しました。この「泉質主義」は、十年以上経て、現在でも大きく掲げられ、草津温泉の代名詞であるかのごとく定着しています。この言葉によって、皆が草津温泉を誇りを持って語れるようになり、ブランドイメージのアップにも大きく貢献するものとなりました。

・『草津温泉歩きたくなる観光地づくり』(平成十五年)

これは、町行政主導の事業で財団法人日本交通公社と一緒に取り組みました。広く全町民に参加を呼びかけ、約百人の参加者とともに行われました。数多くのワークショップを行い、長年の懸案である温泉街への車両規制にも取り組み、ゴールデンウィーク、お盆、秋季の連休などには、交通社会実験(パークアンドライド)も行われました。このパークアンドライドは国の補助金事業となり、平成二十二年度まで実施されました。残念ながら、車両規制は、全員のコンセンサスが得られず常態化はされていませんが、将来に一石を投じたと考えています。また、この事業の結果として、路地裏や歩道の整備が進められ、現在も進行中です。

草津温泉 現在の
取り組み

・『草津観光立町基本計画』
(平成二十一年)

草津町議会で、平成十九年に草

津町観光立町推進基本条例を定め、その実現のためにこの計画が策定されました。これは条例の定めに従い、今までの取り組みや町民憲章などを踏まえた計画で、これからの草津の指針となるものです。この計画と同時に景観法に基づいた景観計画の策定と現在の景観条例の改正を目標に、平成二十一年には景観行政団体が発足。温泉街を五つの地区に分け、順次話し合いを行い、景観まちづくり協定(街並みのルール)が締結できた地区より社会資本整備交付金の補助を受けて、平成二十三年度より、通りに面した店舗の改装や看板のかけ直し、壁の塗装などに一定の補助金を受けられるようになりました。この事業は開始より十五年間継続されるもので、少しずつ色調も整ってきました。さらにより歩きたくなる温泉街を目指していきます。

・『湯畑の再開発』
(平成二十四年)

最後に今年度より草津のシンボルである湯畑の再開発が着手されました(図3)。今年度は総湯「御座の湯」

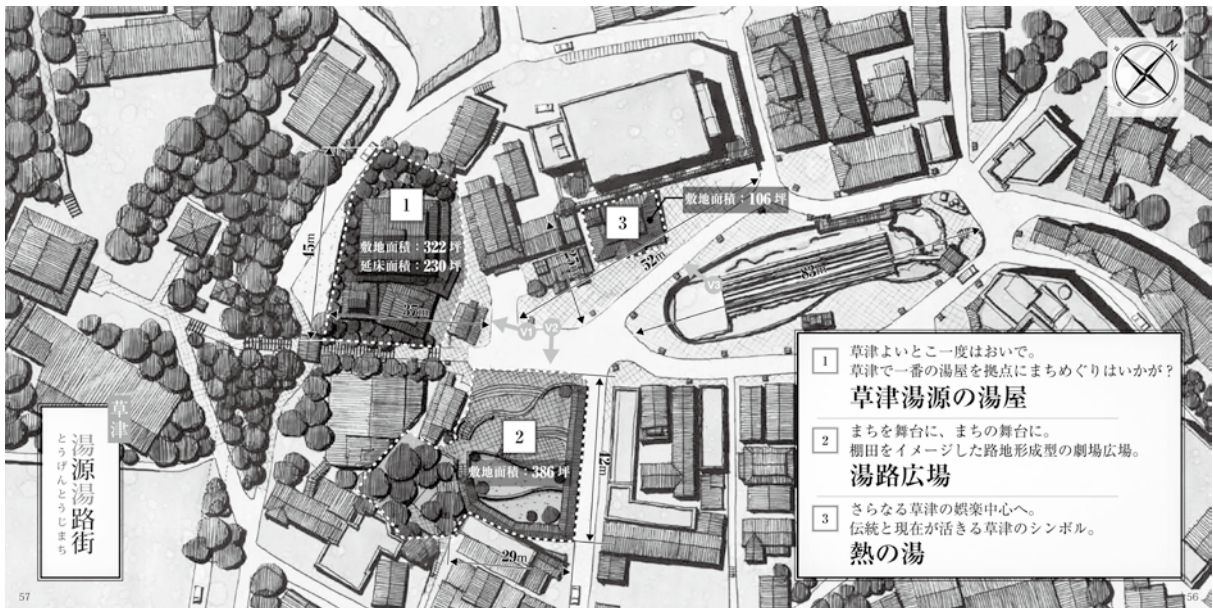


図3 草津 湯源湯路街「草津めぐり 世界の名所「草津温泉郷」の歩き方」(草津町)

- 1 草津よいとこ一度はおいで。草津で一番の湯屋を拠点にまちめぐりはいかが？
草津湯源の湯屋
- 2 まちを舞台に、まちの舞台に。棚田をイメージした路地形成型の劇場広場。
湯路広場
- 3 さらなる草津の娯楽中心へ。伝統と現在が活きる草津のシンボル。
熱の湯

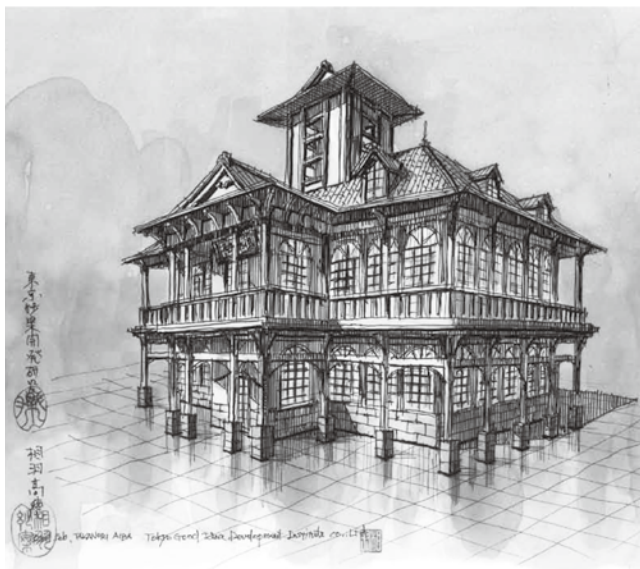


図4 熱の湯「草津めぐり 世界の名所「草津温泉郷」の歩き方」(草津町)

が建てられ、来年には多目的に使える広場の整備、三年目には「湯もみ」のショーが行われる「熱の湯」(図4)の建て替えが行われる予定となっています。街並み整備の進行とあいまって、観光地としての魅力のアップ

につながるものとして大きな期待を寄せています。

魅力ある草津を

次世代に継承する責任

いろいろな草津について書いてきましたが、もちろん例に挙がらなかった失敗例や継続できなかった事業は、私を知るだけでも、この何倍もあります。ただいえることは、成功・失敗は問わず、先人や先輩方が、その時々の変化に対応し、いろ

いろ模索し、果敢に挑戦してきた結果、今の草津温泉があるということ。現在も問題は山積しています。草津町の概況で記したように、旅館の定員稼働率が三〇〇程度で、皆生き残っていきけるのだろうか、また、観光を支える人材がどんどん減少してしまうのではないかと。今の時代を担う我々の年代にとって、時代の変化にさまざまに対応しながら、先人たちより受け継いだものを維持し、子供たちが戻ってきたくなるような魅力と雇用のある町を保ち、次世代へバトンタッチすることが最小限の責務であると考えます。

(くろいわ ゆきお)

(注)エルヴィン・フォン・ベルツ(一八四九〜一九二二) 草津温泉を評価し世界に紹介した明治政府のお雇い外国人のドイツ人医師。東京医学教授、明治天皇や皇太子の侍医を務める。「日本鉱泉論」(明治十三年)、草津の時間湯についての「熱水浴療論」(明治二十九年)等を記す。草津町は町制施行百周年を記念して「ベルツ記念館」を開館。草津町と博士の生まれ故郷のビーティヒハイム・ピツシンゲンは姉妹都市交流五十周年。

黒岩裕喜男(くろいわ ゆきお)

一九六三年草津町生まれ。早稲田大学卒業後、家業の旅館・望雲(創業一五九九年)を継ぐ。二〇〇一年社長就任(十五代目)。二〇一二年五月、草津温泉旅館協同組合理事長に就任し、現在に至る。

地域がビジョンをつくり、実行する

4

阿寒湖温泉

——前田一步園の理念を生かす

公益財団法人日本交通公社
研究調査部長

梅川 智也

「北海道の名付け親」と称される松浦武四郎が六回目の蝦夷地踏査で阿寒の地を訪れたのは、一八五八年（安政五年）のことといわれています。そして、ほぼ五十年後の

一九〇六年（明治三十九年）、明治新政府の経済閣僚・前田正名（まちな）によって初めて阿寒湖畔の開発が着手され、一九二二年（明治四十四年）、最初の温泉旅館が山浦政吉によって開設されました。その後の約百年が阿寒湖における観光地づくりの歴史となります。

観光客は一時を除き、ほぼ順調に推移してきたものと推察されますが、

この十年間の観光客数は、時計の針をほぼ四十〜五十年、逆戻りしたような激変に見舞われました。

私が上司に同道して初めて阿寒湖を訪れたのは、一九九九年十月二十四日日曜日のことでした。将来の阿寒湖温泉に危機感を感じていた町長を始めとする関係者の方々が、今後の方針を検討する会議に休日を返上して集まっておられました。その日を契機に十年以上に及ぶ阿寒湖の皆さんと当財団とのお付き合いが始まりました。

この間、私が常々紹介したいと思っていた組織があります。それは一

般財団法人前田一步園財団。日本型ナショナルトラストともいうべき組織で、阿寒湖周辺に約三千九百ヘクタールの土地を所有、土地の貸付と温泉の販売などで広大な森林を管理し、阿寒湖の自然を守り続けています。全国的に見ても極めてユニークな活動を行っておられる組織といえるでしょう。先日、二時間以上にわたり前田三郎理事長（写真1）にインタビューさせていただきました。今、改めて思うことは、阿寒湖の「自然」だけでなく、「人々の生活」をも守ってきた前田家の「志」の高さ、そして深さです。前田正名（まちな）、正次（しょうじ）、光子（みつこ）

の三氏、そして現在の三郎氏が引き継いできた前田一步園の理念を、これから「阿寒湖の遺伝子」として次世代に紡いでいってほしいと願っています。



写真1 前田三郎理事長
（インタビュー日時：二〇二二年八月三日）

前田正名という「人」

今年（二〇二二年）一月の宝塚雪組公演『Samurai』（原作・月島総記『巴里の侍』）は、二十歳でフランスに留学し、普仏戦争（注1）に巻き込まれ

た若き日の前田正名を描いたもので、私にとつては初めての宝塚観劇でした。それは冒頭、「阿寒湖を自然のままに守る」という正名の志を引き継いだ光子（元タカラジェンヌ）が登場する印象的なシーンから始まりました。

薩摩藩の貧しい漢方医の六男として生まれた正名は、十六歳で長崎に留学（藩費）、その後、坂本龍馬から最も文明の進んだ国として紹介されたフランスに留学するため、和訳

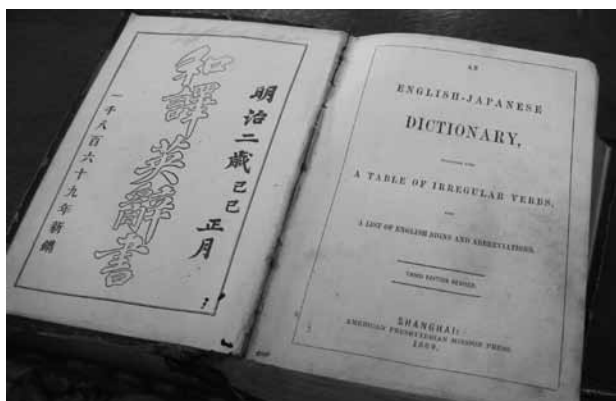


写真2 薩摩辞書（前田一步園財団所蔵）

英辞書、通称「薩摩辞書」（写真2）を編纂、当時は日本に印刷技術がなかったことから上海で印刷し、その辞書を買った資金を元手に一八六九年（明治二年）、フランス人であるコント・モンブランの随行として横浜を出発したのです。

正名は普仏戦争に参加するという貴重な体験を通じて、西欧文明に対する劣等感から解放され、日本文化の貴重性と近代化の方向性（殖産興業政策）を確信するに至りました。それは、いきなり西欧から移植された大工場中心の産業政策から始めるのではなく、生糸や茶、絹織物などが国の在来産業の振興と直輸出による流通の近代化によって地方産業の振興から始めるべきという考え方でした。しかしながら、そうした考え方は時の政府・松方正義らと対立し、農商務次官を最後に四十一歳で退官してしまっています。西欧の最新産業経済事情を背景として輸出産業の保護・育成と直輸出を主張した『興業意見』の編纂は正名最大の功績の一つといわれています。

北海道への関わり

正名と北海道とのつながりは、退官後の一八九二年から始まる全国行脚（前田行脚といわれる）の一環で、翌年の北海道遊説だと思われず。その後一八九九年（明治三十二年）、釧路・天寧（てんねい）に前田製紙合資会社を設立、一九〇六年には北海道国有未開地処分法に基づき阿寒湖周辺の広大な土地を取得しました。私が注目したいのは、当初は、耕作と牧畜植林に供するため^①の目的で、国から土地の払い下げを受けて農場・牧場の経営に乗り出したのですが、西欧への留学経験のある正名は、阿寒湖一帯の濃い針葉樹とマリモが生息する湖との調和に魅せられ「スイスに勝るとも劣らぬ景観」と感嘆し、「この山は切る山ではなく、観る山にすべきである」と観光地への展望を洞察していることです。

その後、一九三二年（昭和六年）に自然公園法の前身である国立公園法が施行され、一九三四年（昭和九年）に阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖を含む約九万ヘクタールが阿寒国立公園として指定されました。その指

定請願が帝国議会に提出されたのは、正名没年の一九二二年（大正十年）でした。

現在、「阿寒国立公園の父」といわれているのは、最初にその景勝を紹介した松浦武四郎とされていますが、前田正名は国立公園指定に向けたもう一人の父といっても過言ではないと思います。

前田一步園の由来、 そして前田光子の 自然観

正名は地方産業振興の一環として茶業や酒造業、商工会、農協など実業界の組織化運動を展開していく一方で、全国各地で模範となるよう牧畜、果樹園、林業などの事業を興していきました。「神戸オーリーブ園」や「播州ブドウ園」などですが、その事業体に付けた名称が「地名+前田一步園」でした。この一步園の名称は、正名の座右の銘「ものごと万事に一步が大切」に由来しています。しかも一步を踏み出すときに、どういう方向に、どういう方法で踏み

出すのか、それが最も大事なのだと。ただ、正名の模範事業は、各地で随分と苦勞したようです。「前田家の財産は全て公共事業の財産とす」という家憲を遺して他界、最後まで残った阿寒前田一步園を次男である正次に託したのでした。

二代目園主正次は「雄大な阿寒湖畔の自然を、後世にわたり存続させたい」という父の遺志を固く守り、阿寒国立公園指定に努力し、切山から観る山々を実現すべく湖畔を本格的な観光地として発展させることを目指します。そして友人である石坂泰三（元経団連会長）や武見太郎（元日本医師会会長）ら周囲の反対を押し切って、これから地域の住民が旅館や住宅などを建設するだろうから、そのための木材が必要だと一九五四年、(株)前田一步園製材所を設立するのです。

阿寒の自然に永く 守られる。ための光子の知恵

一九五七年、正次没後、その妻・光子が前田一步園三代目園主となります。光子最大の功績といえは、自

分が亡くなったら間違いなく阿寒の土地と森林は切り売りされてしまうという危機感から、ほぼ十年をかけて構想してきた前田一步園の財団法人化を一九八三年に実現し、全ての財産を寄付して阿寒の美しい自然を後世に残そうとしたことです。光子の自然観は「自然は最高の師なり」であり、それは彼女自身が起草した次の財団設立趣意書に端的に表れています。

「……自然保護と言う人間の思い上がりです。自然を保護するのはなく、大きく自然の保護を受けていることが真の自然保護であり、私達の生命の糧とわきまえて、如何にこの大切なものを永存すべきかを深く考えるところであります」

また、アイヌの人たちへの思いも深く、天性の芸術的才能である木彫によって自立の道を歩めるよう土地などを無償で提供しました。それが現在のアイヌコタンの基礎となっています。一九八三年、七十一歳で亡くなった光子ですが、その後も「阿寒の母」と慕われ、今でも地元の方々からその人柄がしのばれています。

阿寒湖観光への危機感 と将来ビジョン『再生 プラン2010』

前述したように、阿寒湖の観光客数は二〇世紀中は順調に推移してきましたが、二一世紀に入ってから激変に見舞われます。団体客から個人客への変化、航空政策の自由化、有珠山の噴火など外部環境の変化もありますが、基本的には阿寒湖温泉全体がこれまでの成功体験からそうした急速な環境変化に対応できなかつたことが要因と考えられます。「お客さまは本当に阿寒湖が目的で来ているのか、それとも旅行会社のツアーにたまたま入っていたので泊まっているのか……どうやら、後者の

ほうが多いようだ」という、将来に向けた不安や危機感が当時の関係者の共通する認識であったと思います。そして、当財団と協働して再生に取り組む阿寒湖温泉でのまちづくりが二〇〇〇年から始まりました。

住民参加を軸足に据えて

われわれは、まず地域共通の目標となる十年後の将来ビジョンを住民参加型で策定することを提案し、そこから構造改革に向けた取り組みを始めました。観光客や住民意識など各種調査や関係者へのヒアリング調査、そして四つの部会に分かれてワークショップを開催しながら計画づくりを進めました。また、阿寒湖のライバルをしっかりと学ぼうということ



写真3 『阿寒湖温泉再生プラン2010』

で、カナダの湖畔観光地への視察にも出掛けました。そのメンバー十数名がその後のまちづくりの担い手となってくれたことは望外の喜びでした。そうして二カ年をかけて二〇〇一年度末、策定したのが『阿寒湖温泉再生プラン2010』(写真3)です。「心

地よい湖畔、ゆつくり温泉・阿寒湖

「二泊三日できる湖畔観光地を目指して」を将来目標とし、五十三のプロジェクトが提案されました。そのなかには、前田一步園の理念やアイヌの人々の生活文化などを織り込んだ阿寒湖のまちづくり規範『まよりも家族憲章』も入っています。報告書は机の上で飾られることなく、自分たちが参画して創り上げた活性化の処方箋であり、バイブルであることから、まちづくりの核となる人々は章ことに付箋を付け、背表紙がぼろぼろになるまで読み込んで使っていました。

地元の方々に寄り添う当財団の活動

われわれの業務は、調査や計画が出来上がって終了となるのが通常ですが、地元の方々にとっては実はそこからスタートになります。そこで2010プランに位置づけられたプロジェクトの実現に向けた支援をわれわれの役割であると定め、研究会の立ち上げから国の補助事業導入まで具体的かつ真摯に、地元の方々とともにまちづくりを進めまし

人コラム

阿寒湖温泉の人々へ大自然の厳しさが結束力の強さに

小林 一志氏 (株)阿寒観光汽船代表取締役社長・阿寒観光協会まちづくり推進機構副理事長
小林 恵美子氏 まりも倶楽部部長

前田光子さんは阿寒湖の自然だけでなく、いつも私たち住民を温かく守ってくれていたように感じます。毎年、クリスマスにはご自宅に子供たちを招いて二人一人にプレゼントをくれましたし、阿寒湖小学校



今後の阿寒湖を担う

— 小林 志恵美子さんご夫妻

と中学校にピアノも贈ってくれました。ご自身にお子様がいなかった中で、子供のことはいつも気にかけてくれました。そのピアノはもう三十年以上もたつのにまだ弾けることが分かったんですよ。

阿寒湖の人々の結束力は強いのです。特にそれが発揮されるのはお葬式ですね。五つの町があるのですが、町内できっちり役割分担が決められ、整然と執り行われます。奥様方の炊き出しは見事なものです。一方、競争意識も半端ではありません。年に一度の運動会では応援も含めて熾烈な競争をします。残念ながら最近ではそこまで元気はなくなりましてが……(笑)。阿寒湖の自然が厳し

いだけに団結しないと生きていけなかったでしょうね。まさに運命共同体ですが、逆に「しがらみ」だらけという面もないことはないです。

近年、人口が減って高齢化が進み、まちなかのメンテナンスができなくなってきました。これからは阿寒湖を国立公園としてだけではなく、世界遺産登録も見据えて、より美しく保つための組織体制づくりが大切ですね。

(一)ばやし かずし・えみこ

(二)〇二二年八月三日談

聞き手：梅川智也・後藤健太郎

まりも倶楽部／二〇〇一年に創設された女性によるまちづくりグループ。農林水産省 釧路新聞などとさまざまな表彰を受けている。

た。十年以上が経過し、改めて思うことは、「人」、つまりリーダーとカウンターパート、そして外部有識者に恵まれたこと。地域の意志決定機関である「組織」づくりが戦略的に行えたこと。環境省、国土交通省、そして釧路市など行政からの温かい協力があつたことなどが、プロジェクト実現のポイントであつたと考えられています（注2）。

これからの『創生計画2020』、そして百年後を目指して

『再生プラン2010』は、PDC Aサイクル（注3）に基づいて、三年ごとに二回の見直しを行い、常に生きた計画としてブラッシュアップしてきました。毎年一回開催する「阿寒湖温泉グランドデザイン懇談会」（注4）には、一步園の前田三郎理事長が必ず出席し、われわれの取り組みを叱咤激励してくれました。二〇二一年六月からは、次の十年を見据えた『阿寒湖温

泉・創生計画2020』がスタートしています。そのなかの優先課題は、二〇〇八年に閉鎖されたあるホテルの跡地・約三ヘクタールの活用です。ここは、先述した二代目・正次が地元の人々のために設立した（株）前田一步園製材所の跡地でもあるのです。当初想定していたほど木材需要が伸びず、後を引き継いだ光子もその経営には随分と苦労したようです。二〇二二年秋、三十年ぶりに広大な更地となつて前田一步園財団に返還されることとなっています。温泉街のほぼ中心部に位置し、国道とも接する広大な土地をどう有効活用していくかは、阿寒湖温泉百年の計として英知を集めて検討していくべき課題だと認識しています。



写真4 『阿寒湖温泉・創生計画2020』

阿寒湖の魅力

——自然と文化の承継

また「阿寒湖のマリモ」が一九五二年（昭和二十七年）に国の特別天然記念物に指定されてから六十年を迎えました。釧路市教育委員会マリモ研究室の若菜勇学芸員が「北半球各地に生息するマリモは、日本起源の可能性が高い」との研究成果を発表したことから、阿寒湖の世界自然遺産登録を目指す取り組みが活発化しています。世界遺産登録の意味と阿寒湖で取り組む意義を再確認し、これも百年の計として適切に進めてほしいと願っています。

前田理事長は、阿寒湖の魅力は、「火山と森と湖」が織りなす美しい自然景観が基本であり、その上でのマリモやアイヌ文化などである」と語っておられます。私もまさに同感であり、子々孫々、この阿寒湖の自然と文化を伝え残していく、そして阿寒湖に住む人々を大切にする前田一步園の理念を、「地域の心」まちづくりの遺伝子」として語り継いでいってほしいと願うものです。

最後に、前田正名の遺訓をご紹介します。

したいと思えます。

「後の世の春をたのみて

植えおきし

人の心の桜をぞみる」

【謝辞】

本稿執筆に当たり、（一財）前田一步園財団 前田三郎理事長、並びに新井田利光常務理事に大変お世話になりました。ここに感謝の意を表します。

（つめかわ ともや）

（注1）一八七〇～一八七二年、プロイセン対フランスの戦争。

（注2）阿寒湖温泉におけるまちづくりの取り組みについては、当財団発行「自主研究レポート」や日本観光研究学会学術論文集等をご参照ください。

（注3）Plan（計画）、Do（実施・実行）、Check（点検・評価）、Action（処置・改善）の四つの段階を繰り返しながら、将来ビジョンの目標を達成するためのプロセス、手法。

（注4）『再生プラン2010』、そして『創生計画2020』の進捗状況をチェックし、計画の適切な進捗管理についてアドバイスする外部有識者等からなる会議。

【参考文献等】

- ・人物叢書『前田正名』一九七三年一月、祖田修著、吉川弘文館刊
- ・前田一步園財団「10年の歩み」一九九二年十月（財）前田一步園財団
- ・前田一步園財団「20年の歩み」二〇〇三年十月（財）前田一步園財団
- ・前田理事長講話「二〇二二年（一財）前田一步園財団理事長 前田三郎

観光地づくりの新たな視座・視点

——特集テーマに学ぶ理論と実践

公益財団法人日本交通公社 研究調査部長

梅川 智也

「観光地づくり3.0」の時代

わが国の観光地づくりは、旅館、土産品など自らの事業体の経営、発展や業界の利益を最大化しようという「観光地づくり1.0」の時代から、観光に関連する複数の業界が連携し、行政も巻き込みながら観光振興を図る2.0の時代を経て、今や住民を含むさまざまな主体が共通のビジョンのもとで協働し、自ら考え、行動し、自立していく「観光地づくり3.0」の時代を迎えている(注)。

観光地づくりを支援するわれわれの業務も、戦後しばらくの間行われていた観光診断の時代から地域の観光計画策定支援の時代を経て、どうビジョンを実現させていくか……、合意形成とともに実現化の経験、ノウハウが問われる時代を迎えている。つまり、われわれ自身も「観光地づくり3.0」の時代に対応した知見と能力、そして不断の努力がなければ、鼎の軽重が問われる時代となっている。

観光地づくりの本質とは……

■「観光はまちづくりの総仕上げ」は観光地づくりの理念

本号の特集1で、当財団の調査研究分野を五十年以上にわたりご指導いただいている鈴木忠義氏(東京工業大学名誉教授)が言い続けておられる「観光はまちづくりの総仕上げ」という考え方は、観光地づくりの理論であり、まさに理念である。つまり地域を磨き上げる「まちづくり」を疎かにし、目先の商売を優先するあまり、誘客やプロモーションばかり傾注してきた観光地に対する問題提起でもある。

観光地づくりは、訪れたい、暮らしてみたい、あこがれの地域、あるいは、また来たいと思わせる魅力ある地域をどうやって創り上げるかである。まちづくりの結果が観光に結びつき、地域の産業が潤うという幸せの好循環が地域のなかでどう創り上げられるかであるが、こうした真つ当な考え方が近年忘れられつつあるのではないか。

多様な目的を持った旅行者を受け入れるのが「観光地」であるが、狭義の観光目的だけではなく、求めており、必ずしも旅行者の目的が達成できなくなってきたところに既存観光地の低迷理由があるのではないだろうか。既存の観光地について旅行者は、「観光地化していることに対する安心感(一定のサービスが受けられる)」と同時に、「観光地化した地域に対する嫌悪感(均一化されたサービスしか受けられない)」も感じており、観光地化することの是非を「人間の本来」という原点に立ち返って再確認する必要がある。

■地域の「心」である 遺伝子をつなぐ

今号の巻頭言をお願いした倉敷、そして特集2〜4で取り上げた田布施、草津、阿寒湖。それぞれが国を代表する都市観光地、温泉観光地であるが、いずれの地域にも、住民誰もが共有できる分かりやすいビジョンが存在していることに気がつく。

天領・倉敷は、高梁川流域で取れた年貢米などの一大集積地(内陸

港)として発展したが、現在の美観地区に並ぶ蔵は当時の商人らによって建てられたものである。倉敷の実業家、社会事業家大原孫三郎の長男として生まれ、ドイツ視察の経験を持つ大原総一郎は、一九三八年(昭和十三年)ローテンブルクを参考として倉敷の「街並み保存」という概念(ローテンブルク構想)を打ち出した。その遺伝子が語り継がれ、戦後の近代化一色の時代に「倉敷都市美協会」が結成され、全国の街並み保存運動へと発展していく、その先駆けとなったのが倉敷である。

由布院温泉は、古くは別府十湯の一つであったが、行政界の変更によって外され、奥別府といわれていた。別府温泉近代化の祖・油屋熊八が亀の井ホテルの別荘として金隣湖に隣接して建てたのが亀の井別荘である。その油屋らが招聘したのがドイツ留学から帰国した東京大学の本多静六博士であった。一九二四年、町主催の『由布院温泉発展策』という講演を行い、保養滞在型の温泉地を目指すというビジョンが町民に示された。その講演の内容は小学生の教科書の

副読本として印刷され、今でも地元の子供たちに読み継がれている。

草津温泉の歴史は神話の時代にまでさかのぼるらしいが、一八八〇年、ドイツのベルツ博士により『日本鉱泉論』が発刊、草津の名と欧州では湧出しない強酸性の泉質の素晴らしさが世界に伝えられた。自らも温泉研究所と療養所を建設するために土地を購入したが、その計画は実現しなかった。しかし、「ベルツマインド」といわれるように草津を温泉療養と高原リゾートとして発展させる方向性を示し、それが住民にも理解浸透していった。

阿寒湖温泉は、フランス留学経験を持つ前田正名が遺した広大な土地と森林を、次男の正次、その妻の光子が継承し、前田一步園を財団法人化して、阿寒湖周辺の自然を永続的に後世に伝え、観光地として発展させることの重要性を地域住民に伝えた。こうした地域の方向性やビジョンに関する遺伝子の存在こそが、地域の「心」といふべきものである。そうした素晴らしい遺伝子がありながら、上記観光地でも少しづつ忘れ去

られようとしていることが気がかりである。

③「時間」と「空間」のデザイン——求められるハードとソフトのバランス

観光地としては、何を目的に人に来てくれるのか、あるいは来てもらうためには何をどうすればいいのかを追求すること、これが観光地づくりの要諦である。つまり、旅行者を取り巻く「空間」、すなわちハードと旅行者が持つ「時間」、すなわちソフトとをどうデザインして提供するかが観光地づくりということになる。

近年、ハードとソフトのバランスは明らかに崩れている。一九五〇年代後半から一九八〇年代後半の約三十年間続いた「ハード」中心の時代から、バブルが崩壊した一九九〇年代前半から現在に至る「ソフト」重視の約二十年間を経て、ようやく振れすぎていた振り子の針が戻るようになっている。この二十年間で「舞台」としての観光地は、都市に比べて空間の劣化が激しく、豊かさを感じさせない状況に陥っている。

人が離合集散する観光地は、美しくなければならぬ。混沌としたアジア的な生活空間も魅力的ではあるが、いざというとき(例えばサミット開催など)、風格のある観光地やリゾートの存在は、そこに住む国民の民度に深く関わる。一定の規律やルールに基づいた自律した美しい観光地づくりが全国で実践されることこそが、国際競争力の強化につながる。

これからは、ハードかソフトかという二者択一的な政策ではなく、両者は車の両輪であり、両者がそろって初めて生きてくるといふこの二十年間の教訓から「バランス」を大切にしなければならぬ。

特集で取り上げた由布院温泉では湯の坪街道の電柱地中化など景観整備が進められ、草津温泉では積年の課題であった「湯畑」周辺の整備が進められている。そして阿寒湖温泉では湖畔公園の整備が進むきっかけとしてあるホテル跡地の活用が検討されている。このように、緊縮財政のなかで予算がないからと「空間」のデザインから逃げない姿勢が、

視座

観光地の高質化に寄与することとなる。

特集テーマからの

これからの観光地づくりに向けて——特集に学ぶ

今回の特集で取り上げた観光地のように「長く生き

続ける観光地」にこそ、観光地づくりの本質があると考えられる。そこには、鈴木氏が指摘する人間の本質である「喜び」と「生きがい」の追求が底辺に流れており、由布院、草津、そして阿寒湖においても真摯に「人間の本质」に向き合い続けてきた。まちや地域にはそれぞれ特色があり、個性があり、それを伸ばそうというのが観光である。普遍的なセオリーが使える部分もあろうが、深い部分は決して一般化、共通化できない。それほど地域は浅薄ではなく、まちづくりや地域づくりの「マニユアル」には載っていない「何か」があるのが地域である。それは卓越した人材であったり、誰も知らない優

れた地域資源であったり、歴史と伝統に裏付けられた文化や作法であったり……。その意味で「地域に入るときに作法」を常にわれわれは意識してきた。そして、日々の営みのなかに地域が脈々と紡いできた「遺伝子」の存在を垣間見るのである。

観光地づくりは、地域の将来目標（どういう「まち」にしたいか）を住民が共有し、語り継ぐこと、そして地域の遺伝子を明確なイメージとして認識することが、地域の「心」となり、理念となる。そしてこれからは、そうした遺伝子を人から人へとつないでいく知恵が求められる。われわれの役割は、地域の遺伝子を探り出し、その「心」を具体的な理念として「形」にして表現し、少しでも実現に向けた手助けをして差し上げることであると理解している。

（つめかわ ともや）

（注）観光地づくり30：観光分野のこうした段階発展論に学術的な定義はなく、あくまで分かりやすくするための筆者の個人的見解。技術やノウハウの進展を示す表現方法の一つであり、ダニエル・ピンクの『モチベーション30』やティム・オライリーらによる『Web 2.0』などが有名。組織論や音楽理論などでも応用されている。

「観光地づくり」と「観光まちづくり」

どちらも学術的に定説があるわけではない。「観光地づくり」はかつてのハード中心の観光地開発、観光地整備に続くソフトも含めた概念として使われてきたが、「観光まちづくり」は二〇〇〇年頃から都市計画の分野で使われ始め、一時は国の事業としても位

置つけられた。まちづくりから観光に向かうタイプと観光からまちづくりに向かうタイプの二つがあるといわれている。特に後者が本号で対象とした「観光地におけるまちづくり」で、近年のハードからソフト重視の時代のなかで全国の観光地で盛んに実践された。

<観光地づくりと観光まちづくりの関係>



（注）「観光まちづくり」には地域住民の参画が必須
 出典：「観光まちづくりはどこに向かうのか」梅川智也：『都市計画 No.295』
 公益財団法人日本都市計画学会（2012年2月）

倉敷・由布院温泉・草津温泉・阿寒湖温泉の観光地づくりの主な経緯

	倉敷	由布院温泉	草津温泉	阿寒湖温泉
戦前	<ul style="list-style-type: none"> 1930年(昭和5年)大原孫三郎により大原美術館設立(日本最初の西洋美術中心の私立美術館) 1938年(昭和13年)11月大原総一郎氏帰朝第一声「倉敷を日本のローテンブルクに!」(ローテンブルク構想) 	<ul style="list-style-type: none"> 1924年(大正13年)10月11日 本多静六博士による「由布院温泉発展策」講演 1925(大正14年)由布院～別府間に亀の井バスが運行開始 1925(大正14年)大湯線(現久大線)南由布駅～北由布駅(現由布院駅)間開通 	<ul style="list-style-type: none"> 1878年(明治11年)ベルツ博士、初めて草津を訪れる 1880年(明治13年)ベルツ博士「日本鉱泉論」発刊 1896年(明治29年)草津の時間湯に関する『熱水浴療論』(ベルツ)発刊 1913年(大正2年)内堀利次によりスキー伝来 1914年(大正3年)スキークラブ開設 1919年(大正8年)「草津町温泉使用条例」制定 1926年(大正15年)軽井沢～草津間 草軽電鉄全線開通 	<ul style="list-style-type: none"> 1858年(安政5年)松浦武四郎が阿寒を探検 1897年(明治30年)マリモ発見 1899年(明治32年)前田正名が釧路・天寧に前田製紙合資会社設立 1906年(明治39年)前田正名が阿寒湖畔の開発に着手 1910年(明治43年)正名、「前田家の財産は全て公共事業の財産とす」家憲を立てる 1921年(大正10年)前田正名逝去 1934年(昭和9年)阿寒湖・摩周湖・屈斜路湖を含む地域(約9万ha)阿寒国立公園に指定
昭和20年	<ul style="list-style-type: none"> 1948年(昭和23年)倉敷民芸館開館 1949年(昭和24年)倉敷都市美術協会設立(民芸運動が端緒) 1950年(昭和25年)倉敷考古館開館 1968年(昭和43年)倉敷市伝統美観保存委員会設立 1969年(昭和44年)上記条例による保存計画により、倉敷川畔美観地区・同特別美観地区・保存家屋ならびに保存記念物指定 1973年(昭和48年)倉敷紡績の工場を改修して、観光施設アイビスクエアとして再生 1978年(昭和53年)文化財保護法に基づく「倉敷市伝統的建造物群保存地区保存条例」を制定 1979年(昭和54年)都市計画法に基づく「倉敷市伝統的建造物群保存地区」の区域決定 1981年(昭和56年)大原美術館・川島虎次郎記念館完成 1988年(昭和63年)瀬戸大橋完成・JR瀬戸大橋線開業 	<ul style="list-style-type: none"> 1952年(昭和27年)由布院盆地ダム建設計画発表 1955年(昭和30年)湯平村と由布院町が合併して湯布院町に 1959年(昭和34年)国民保養温泉地指定 1970年(昭和45年)8月猪の瀬戸湿原ゴルフ場建設計画発表、「由布院の自然を守る会」準備会発足 1970年(昭和45年)12月町造り雑誌「花水樹」創刊(「由布院の自然を守る会」準備会の機関誌) 1971年(昭和46年)3月「由布院の自然を守る会」から「明日の由布院を考える会」へと改組 1971年(昭和46年)欧州研修旅行を経て最初の観光まちづくりの哲学「由布院は大きくなることを追いかけることをやめて、小さいままの豊かさを追いかけてよ。主役は地域である。」が提唱される。「クアオルト構想」の発芽 1975年(昭和50年)4月大分県中部地震発生 1975年(昭和50年)7月辻馬車運行開始、8月第1回ゆふいん音楽祭、10月第1回牛喰い絶叫大会開催 1976年(昭和51年)第1回湯布院映画祭開催 1981年(昭和56年)国民保健温泉地指定 1982年(昭和57年)百日シンポジウム開催 1986年(昭和61年)クアオルト構想推進委員会答申提出 	<ul style="list-style-type: none"> 1948年(昭和23年)日本で最初の邦人用スキーリフト架設 1949年(昭和24年)上信越高原国立公園指定 1950年(昭和25年)草津観光協会設立 1960年(昭和35年)白根火山ロープウェイ完成 1960年(昭和35年)湯もみショー開始 1962年(昭和37年)「草津高原開発計画」発表 1964年(昭和39年)「草津町温泉使用条例」制定 1966年(昭和41年)バスターミナル開業 1968年(昭和43年)「草津観光開発基本計画」発表 1972年(昭和47年)「草津町再開発計画」(岡本太郎による)これに基づき、1974年(昭和49年)湯畑改造 1974年(昭和49年)万代鉱温泉給湯開始 1976年(昭和51年)「草津町社会開発計画」発表 1979年(昭和54年)草津町民憲章「歩み入る者にやすらぎを、去りゆく人にしあわせを」制定 1980年(昭和55年)草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル開始 1983年(昭和58年)町営・大湯乃湯開業 1984年(昭和59年)和風村開業 1989年(昭和63年)「群馬リフレッシュ高原リゾート構想」の13の重点整備地区の一つに指定されリゾート開発が進む(音楽の森スキー場、温泉資料館完成) 	<ul style="list-style-type: none"> 1949年(昭和24年)阿寒観光協会設立 1950年(昭和25年)第1回まりも祭り開催 1951年(昭和26年)足寄～阿寒湖畔間に定期バス運行開始 1952年(昭和27年)マリモ特別天然記念物に指定 1954年(昭和29年)株式会社前田一歩園製材所設立 1954年(昭和29年)阿寒遊覧船株式会社設立 1956年(昭和31年)第1回阿寒スピードスケート大会開催 1961年(昭和36年)チュウレイ島にマリモ観覧施設開設 1963年(昭和38年)阿寒湖畔スキー場開設 1965年(昭和40年)阿寒湖畔バスセンター設置 1968年(昭和43年)阿寒湖畔ビジターセンター開館 1971年(昭和46年)第1回阿寒湖水上まつり開催 1977年(昭和52年)阿寒湖畔新野営場開設 1978年(昭和53年)チュウレイ島にマリモ展示観察センター開設 1979年(昭和54年)第1回阿寒湖水上フェスティバル開催 1983年(昭和58年)財団法人前田一歩園財団設立 1983年(昭和58年)「阿寒の母」前田光子逝去 1984年(昭和59年)阿寒湖ビジターセンター新装開設 1986年(昭和61年)阿寒湖畔特定環境保全公共下水道完成
平成	<ul style="list-style-type: none"> 1991年(平成3年)大原美術館本館増設 1997年(平成9年)倉敷チボリ公園開園 2002年(平成14年)「倉敷屏風祭」が復活開催 2004年(平成16年)「倉敷市観光振興アクションプラン 観光都市「くらしき」の復活を目指して!～滞在型観光推進に向けた感動体験のまち「くらしき」づくり」策定 2005年(平成17年)「地産地消」がテーマのくらしき朝市「三斎市」開始 2005年(平成17年)美観地区夜間景観照明事業を3カ年計画で実施 2008年(平成20年)倉敷チボリ公園開園 2008年(平成20年)倉敷まちづくり株式会社設立(倉敷市・倉敷商工会議所・地元金融機関等が出資) 2009年(平成21年)倉敷物語館開館 2010年(平成22年)倉敷市中心市街地活性化基本計画「世界に誇る伝統文化 居心地のよいまち くらしき」内閣府認定 2011年(平成23年)チボリ公園跡地に倉敷みらい公園・三井アウトレットパーク倉敷・アリオ倉敷開業 2012年(平成24年)美観地区に「林源十郎商店・倉敷生活デザインマーケット」開業(倉敷まちづくり株式会社) 	<ul style="list-style-type: none"> 1989年(平成元年)特急「ゆふいんの森」号運行開始 1990年(平成2年)由布院駅舎完成(磯崎新設計) 1990年(平成2年)由布院観光総合事務所発足 1990年(平成2年)「市場(バザール)のある温泉リゾート村構想」発表 1990年(平成2年)「潤いのある町づくり条例」制定 1990年(平成2年)「健康温泉館クアージュゆふいん」開館 1996年(平成8年)「由布院温泉観光基本計画」発表 1998年(平成10年)ゆふいん料理研究会発足 2000年(平成12年)3月「ゆふいん建築・環境デザインガイドブック『ムラ』の風景をつくる」作成 2002年(平成14年)湯布院・いやしの里の歩いて楽しいまちづくり交通実験の実施 2005年(平成17年)10月狭間町・庄内町・湯布院町が合併し、由布市発足 2006年(平成18年)「観光環境容量・産業連関分析調査及び地域由来型観光モデル事業」実施 2008年(平成20年)由布市景観条例施行 2011年(平成23年)由布市観光基本計画策定「由布市・観光発展策～懐かしき未来」の創造 	<ul style="list-style-type: none"> 1992年(平成2年)シズカ山スキー場完成 1990年(平成4年)「リゾートマンション建設凍結」を宣言 1993年(平成5年)「草津町景観条例」制定 1996年(平成8年)草津温泉女将会湯の華会設立 1997年(平成9年)～1999年(平成11年)観光協会・旅館協同組合が中心となり「草津温泉ブラッシュアップ計画策定調査」「古さと新しさを兼ね備えた新湯治場」 2000年(平成12年)ベルツ記念館開館 2001年(平成13年)「草津の冬を考える会」発足 2001年(平成13年)「草津温泉 泉質主義宣言」 2002年(平成14年)「草津温泉歩きたくなる観光地づくり基本計画」策定 2003年(平成15年)～「草津温泉歩きたくなる観光地づくり社会実験」実施 2004年(平成16年)「草津町温泉使用条例」最終改正 2007年(平成19年)「草津町観光立町推進基本条例」制定 2008年(平成20年)～2010年(平成22年)「新草津温泉ブラッシュアップ事業」実施 2009年(平成21年)「草津観光立町基本計画」策定 2009年(平成21年)景観行政団体に移行、「いで湯の里草津」景観プロジェクトスタートアップ事業開始 2010年(平成22年)「迷い車プロジェクト」(カーナビ調査)実施 2011年(平成23年)4月18日草津町観光安全宣言 2012年(平成24年)湯畑周辺の再整備着工(「御座の湯」新築、2013年度「湯路広場」、2014年度湯もみショー会場「熱の湯」新築の予定) 	<ul style="list-style-type: none"> 2000年(平成12年)阿寒湖観光協会 財団法人日本交通公社と共同で長期計画「阿寒湖温泉活性化基本計画」(通称 再生プラン2010)着手 2000年(平成12年)～2001年(平成13年)度「再生プラン 2010」策定 2001年(平成13年)6月「阿寒湖温泉まちづくり協議会」設立 2001年(平成13年)7月カナダ(バンフ、ジャスパー)国立公園視察 2001年(平成13年)11月女性だけのまちづくりの会「まりも倶楽部」設立 2002年(平成14年)「阿寒湖温泉再生プラン2010」策定 2002年(平成14年)阿寒湖畔エコミュージアムセンター完成 2005年(平成17年)1月「阿寒観光協会」と「阿寒湖温泉まちづくり協議会」が統合され「阿寒観光協会まちづくり推進機構」設立 2005年(平成17年)7月「特定非営利活動法人阿寒観光協会まちづくり推進機構」設立 2005年(平成17年)10月釧路市・阿寒町・音別町が合併し、新「釧路市」発足 2007年(平成19年)「特定非営利活動法人阿寒観光協会まちづくり推進機構」役員改選、組織改編 2008年(平成20年)阿寒湖まりも館開館 2011年(平成23年)「阿寒湖温泉・創生計画2020」開始 2012年(平成24年)「阿寒湖温泉アイヌシアターイコロ」開館

出典：各種資料から公益財団法人日本交通公社作成

研究成果の紹介

国立公園の 利用者意識に関する研究

公益財団法人日本交通公社 観光調査部研究員

五木田 玲子

本研究では、国立公園のより良い利用のあり方について検討するため、知床、奥日光、上高地、立山を訪れた観光客を対象としてアンケート調査を実施し、各公園の利用実態・意識を他公園と比較可能な形で把握した。

各公園の利用者属性・ 利用形態・利用者意識

知床

他公園に比べて三十〜四十代が多く、子供連れが多い。集客圏が広く、初来訪者が多いことも特徴である。周辺での宿泊率は高いが、自然散策時間は短い。活動タイプは、「観光型（食事、買い物、温泉、観光施設見学等を中心とした活動）」が八割を占め、「自然型（ハイキング、植物・動物観察等を中心とした活動）」は二割にとどまる。

訪問動機は「原生的な自然にふれたい」が八割を占め、他地域と比べてより大きな動機となっている。活動については「ガイドツアー参加（有料）」の評価が最も高いことが特徴。不満は「特になかった」という回答が四・五割を占めるものの、自由記述では「駐車場の混雑・不足」に関する意見が複数挙げられた。

奥日光

九割が関東からの観光客ということもあり、日帰りが多く、五回目以上のハードリピーターが七割を占める特徴的な構成である。活動タイプは、「観光型」の比率が六割を占め、「自然型」

動機 (複数回答)	活動評価 (大変満足の割合)	不満 (複数回答)	総合満足 (大変満足の割合)	感動 (大変感動の割合)	効用(自分の人生を豊かにするか) (大変そう思うの割合)
原生的な自然にふれたい85.1% 美しいものを見たい83.8% 仲間や家族との時間を楽しみたい59.7%	ガイドツアー参加(有料)52.5% 景色を見る49.0% 登山41.9%	特になかった46.1% 他の利用者のマナー不足11.3% 案内・説明板のわかりづらさ11.1%	26.9% (晴れのみ33.8%)	27.1% (晴れのみ34.8%)	22.6% (晴れのみ26.4%)
美しいものを見たい76.9% 原生的な自然にふれたい68.1% 仲間や家族との時間を楽しみたい62.2%	景色を見る46.7% ハイキング40.9% 温泉39.7%	特になかった39.2% 他の利用者のマナー不足14.7% 施設の不衛生14.7%	23.0% (晴れのみ29.7%)	20.2% (晴れのみ25.5%)	21.1% (晴れのみ24.2%)
美しいものを見たい87.5% 原生的な自然にふれたい80.6% 仲間や家族との時間を楽しみたい58.8%	景色を見る53.9% ハイキング42.8% 登山41.7%	特になかった33.2% 歩道・通路の混雑23.7% 他の利用者のマナー不足18.9%	30.6% (晴れのみ40.7%)	28.9% (晴れのみ38.7%)	33.1% (晴れのみ37.9%)
美しいものを見たい87.5% 原生的な自然にふれたい72.3% 仲間や家族との時間を楽しみたい59.3%	景色を見る47.5% 参拝44.7% 登山40.8%	特になかった41.9% 他の利用者のマナー不足16.7% 歩道・通路の混雑16.3%	26.9% (晴れのみ40.3%)	28.9% (晴れのみ41.3%)	27.5% (晴れのみ32.8%)

とした活動／登山型：登山、キャンプを中心とした活動／観光型：食事、買い物、温泉、観光施設見学等を中心とした活動

調査概要

調査対象地 (調査地点)	<ul style="list-style-type: none"> ・知床国立公園知床地域(知床五湖高架木道出入口) ・日光国立公園奥日光地域(華厳の滝、赤沼駐車場(戦場ヶ原自然研究路入り口)、三本松駐車場(戦場ヶ原展望台)) ・中部山岳国立公園上高地地域(上高地バスターミナル) ・中部山岳国立公園立山地域(室堂ターミナル) <p>*調査対象地の選択にあたっては、利用者の属性・行動の多様性、調査対象地の資源の多様性、エリア設定の容易さを考慮。</p>
調査方法	調査員による調査票の手渡し配布、郵送による回収
調査項目	公園利用者の基本属性、旅行内容、利用者意識など(約30問)
調査期間	2011年7〜8月、9〜10月の2期
調査規模	配布：18,800件、回収：6,006件、回収率：31.9%

表1 各公園の利用者属性、利用形態、利用者意識

	性別	年代	発地	来訪回数	同行者	調査地点周辺での滞在種別*1	自然散歩時間	活動タイプ比率*2	訪問場所(複数回答)
知床(N=414)	男性49.1% 女性50.9%	~20代 8.8% 30~40代 38.2% 50代 24.3% 60代~ 28.7%	関東35.5% 道内35.0% 近畿7.8% (3地域計87.3%)	初来訪者52.5% リピーター47.5% (5回目以上10.2%)	夫婦旅行36.2% 子供連れ家族旅行21.4% 大人の家族旅行13.8% (3タイプ計71.4%)	日帰り32.8% 宿泊67.2%	~2時間 55.6% 2~4時間 26.6% 4時間~ 17.8%	自然型2 観光型8	知床峠60.0% 道の駅うとろ・シリエトク52.5% 知床五湖(高架木道のみ 散策) 51.8%
奥日光(N=2,225)	男性46.4% 女性53.6%	~20代 5.1% 30~40代 21.5% 50代 22.6% 60代~ 50.9%	関東88.1% 東北3.3% 東海2.7% (3地域計94.1%)	初来訪者5.6% リピーター94.4% (5回目以上66.9%)	夫婦旅行43.6% 子供連れ家族旅行16.1% 大人の家族旅行16.1% (3タイプ計75.8%)	日帰り70.1% 宿泊29.9%	~2時間 39.4% 2~4時間 34.1% 4時間~ 26.5%	自然型4 観光型6	戦場ヶ原70.8% 中禅寺湖65.8% 竜頭の滝57.3%
上高地(N=1,842)	男性42.6% 女性57.4%	~20代 6.2% 30~40代 25.6% 50代 22.7% 60代~ 45.5%	関東43.0% 近畿19.9% 東海18.6% (3地域計81.5%)	初来訪者27.9% リピーター72.1% (5回目以上33.3%)	夫婦旅行31.3% 友人旅行18.1% 大人の家族旅行16.0% (3タイプ計65.4%)	日帰り65.9% 宿泊34.1%	~2時間 26.2% 2~4時間 32.7% 4時間~ 41.2%	自然型6 登山型1 観光型3	河童橋91.6% 大正池62.9% 田代池・田代湿原48.8%
立山(N=1,525)	男性41.8% 女性58.2%	~20代 5.5% 30~40代 22.8% 50代 21.8% 60代~ 49.8%	関東33.1% 近畿18.7% 東海14.0% (3地域計65.8%)	初来訪者40.8% リピーター59.2% (5回目以上18.8%)	夫婦旅行33.3% 友人旅行21.1% 大人の家族旅行13.8% (3タイプ計68.2%)	日帰り65.7% 宿泊34.3%	~2時間 44.2% 2~4時間 22.6% 4時間~ 33.2%	自然型5 登山型1 観光型4	室堂98.2% みくりが池72.3% 黒部ダム71.3%

*1 調査地点周辺 知床:ウトロ、岩尾別、羅臼/奥日光:日光湯元温泉、中禅寺湖畔/上高地:上高地内(山小屋含む)/立山:アルペンルート内(山小屋含む)

*2 活動タイプ 公園内で行った活動の対応分析より得た因子得点を利用し、クラスター分析によって公園利用者を以下の3タイプに分類した。自然型:ハイキング、植物・動物観察等を中心

の四割をやや上回る。

活動評価の上位に、四地域の中で唯一「温泉」が含まれた。不満については、四割が「特になかった」ものの、自由記述では「施設の不衛生(トイレ)」を不満として挙げる声が多数見られた。

なお、奥日光は調査地点を三方所設けており、地点ごとに特徴的な結果が得られた。華厳の滝を訪れる人の多くが日光山内にも立ち寄るが、戦場ヶ原まで足を延ばす人は半数に至らない。

一方、戦場ヶ原自然研究路入り口に位置する赤沼を訪れる人は、小田代原や戦場ヶ原を中心に回り、華厳の滝や日光山内にも立ち寄る人は三割弱にとどまった。各地点での大変満足割合は、華厳の滝一四・六%、赤沼二九・七%、三本松二二・四%であり、赤沼を訪れた人、つまり、戦場ヶ原や小田代原の自然に触れながら散歩する人は、他地点に比べてより満足している。

上高地

夫婦旅行が最も多い客層ではあるが、友人旅行も多いのが特徴。添乗員付き旅行が三割を占める。上高地内での宿泊率は三割にとどまるが、自然散歩時間は長い。活動タイプは、四地域で最も「自然型」の比率が高く六割を占め、「登山型」一割、「観光型」三割であった。

天候が晴れの時のみに限った場合、総合満足、効用ともに四地域の中で最も高い評価とな

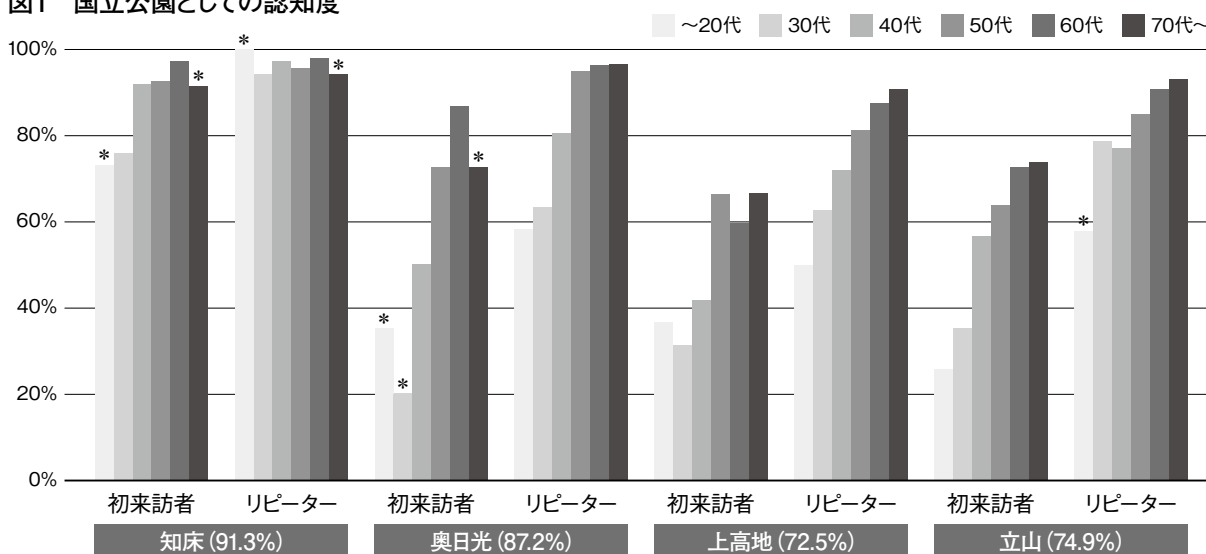
った。なお、満足、感動は、晴れると評価が高まり、雨が降ると著しく評価が下がるが、効用は天気の影響を受けにくい。訪問動機としては、「美しいのを見たい」「原生的な自然にふれたい」が八割を超える。活動評価については、四地域の中で最も「景色を見る」に対する評価が高く、大変満足割合が五割を超える。不満は、四地域の中で「特になかった」の比率が最も低く、「歩道・通路の混雑」や「他の利用者のマナー不足」に対する意見が目立った。

立山

山岳公園ということもあり、利用者属性・形態については上高地と似た構成である。ただし、自然散歩時間は上高地と異なり二時間未満と短い人が多く、その一方で、長い人も多い。活動タイプは、「自然型」五割、「登山型」一割、「観光型」四割であった。

天候を晴れのみに限った場合、四地域の中で感動の度合いが最も高いのが立山であった。活動評価については、「参拝」が上位を占めており、他地域には見られない特徴的な結果となった。これは「雄山登山」「雄山神社参拝」と捉えているためと考えられる。不満については、「他の利用者のマナー不足」「歩道・通路の混雑」の他、自由記入では「団体客・ガイドツアーの存在」について不満の声が多く挙げられた。

図1 国立公園としての認知度



*回答数30未満のため読み取りには注意が必要

国立公園としての認知度

次に、国立公園としての認知度を見ると、「知っている」という回答は七九・九%、初来訪者に絞ると六〇・一%であった。これは、国立公園を訪れている人に対して行った調査であること、さらに、今回の調査対象地はいずれも国立公園の中でもさらに日本を代表する公園であることを考えると、必ずしも高い数字とは言えない。認知度を大きく左右するものとして、まず年齢が想定されるが、三十代以下の認知度は六割を下回っており、さらに三十代以下の初来訪者に絞ると四割を下回る。このように、若年層ほどその観光地を国立公園として認知していないということが明らかになった。

図1は、年齢に加え、地域、来訪経験別に認知度を示したものである。知床は九一・三%と年齢・来訪経験にかかわらず国立公園としての認知度が高い地域であるのに対し、奥日光は認知度八七・二%と高いものの、初来訪者に限ると著しく低下する。上高地、立山はともに認知度は七割強であり、二十〜三十代の初来訪者は四割未満となった。

一方、国立公園であることが旅行先を選ぶ理由のひとつであったと回答した人は三五割、年別に見ると二十代の比率が四五割と高くなっ

ている。若者は、国立公園として認知しさえすれば、つまり、国立公園としての魅力が伝わりさえすれば、むしろ他の世代よりも積極的に国立公園を訪れる傾向が強いと言える。

国立公園の相対的位置付けから見えてくるもの

これまで国内の複数の公園について統一かつ継続的な調査が実施されたことはなく、対処すべき課題が発生した際に各公園で独自に調査票を設計して実施していることが多い。しかし、多くの公園・地域で統一した調査が実施されるようになれば、自地域の特性を他の地域や過去の状況と比較し、その相対的な位置付けを明らかにすることが可能となる。

また、利用者属性、利用形態および利用者意識は、各公園・各地域によって大きく異なる。今、自分たちの公園・地域にはどういう人が来ているのかという相対的な位置付けを知ることが、どういう人に来てほしいのか、どういう公園・地域になりたいのか、という方向性を検討する上で欠かせない。そのため、地域ごとに利用者データを的確に収集することが非常に重要になってくる。個性を生かした魅力ある公園・地域をつくるために、統一的な調査の実施が望まれる。

(こきた れいこ)

JTBF通信 財団活動のいま…

「公益財団法人日本交通公社」の活動概要

当財団は、一九六三年（昭和三十八年）に（株）日本交通公社（現（株）ジェイティービー）を分離した後、「旅行及び観光の健全な発達を期し、観光関係事業の向上発展を図る」（旧寄附行為）ことを目的に、公益事業に主体的に取り組む組織へと生まれ変わりました。以降、この目的を達成すべく、今日に至るまでさまざまな事業活動に従事しています。

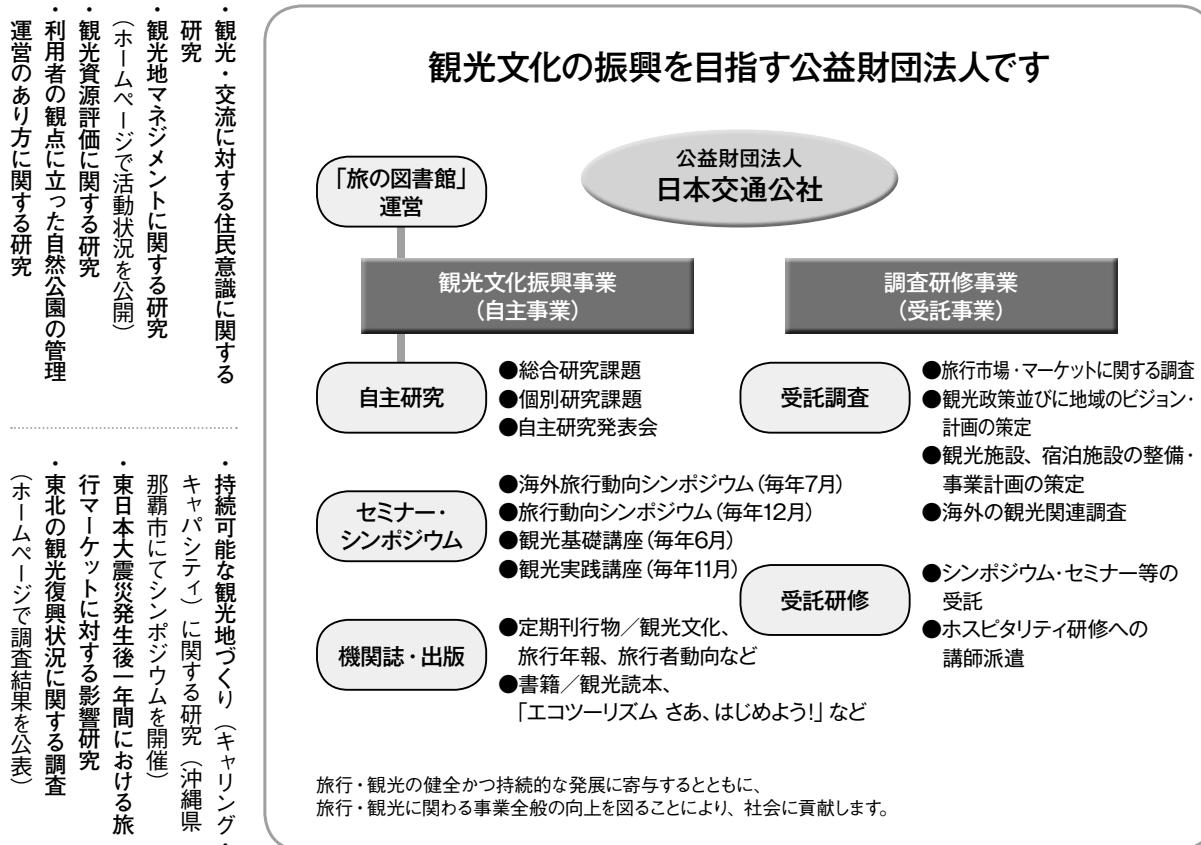
当財団の事業は、大きく次の二本の柱により構成されています。

① **観光文化振興事業（自主事業）**
当財団の独自財源を活用し、自主研究の推進、主催セミナー・シンポジウムの開催、「旅の図書館」の運営、機関誌「観光文化」や研究

成果をまとめた出版物の発行、観光政策相談室の運営、賛助会員事業、大学での寄付講座（寄付講義）の設置、学会での研究成果の公表などに取り組んでいます。

- このうち、自主研究については、二〇二二年度（平成三十三年度）において、主に以下の研究を行いました。
- ・旅行者動向調査
（旅行者動向2011）として出版
 - ・海外旅行市場調査（マーケット・インサイト2011）として出版
 - ・旅行市場構造分析研究会
温泉まちづくり研究会
（ホームページで活動状況を公開）
 - ・地域における戦略的なインバウンド推進に関する研究（インバウンド推進のツボ2）として出版
 - ・マーケットの先行的トレンド研究
（先読み！マーケットトレンド）としてホームページで公表

観光文化の振興を目指す公益財団法人です



・陸中海岸地域の観光復興に関する基礎調査（ホームページで調査結果を公表）
・田野畑村の観光復興にかかる支援事業

② 調査研修事業（受託事業）

国や地域の観光振興、地域活性化、観光人材育成に資することを目的に、各種事業のお手伝いをしています。

二〇二一年度（平成二十三年度）は、国（観光庁、国土交通省、内閣府、経済産業省、環境省）、都道府県（青森県、東京都、長野県、三重県、鳥取県、沖縄県）、市区町村（神奈川県箱根町、新潟県胎内市、岐阜県白川村、三重県鳥羽市、長崎県佐世保市、大分県由布市、奄美群島広域事務組合）、各種団体、民間企業等の事業に参画しました。

*これまでの調査研修実績一覧は当財団のホームページに掲載されています。

二〇二二年（平成二十四年）四月の「公益財団法人」への移行後も基本方針は変わることなく、「旅行及び観光の健全な発達と観光関係事業の向上発展に関する事業を行い、我が国の観光文化の振興に寄与する」（定款）ことを目的に活動していく所存です。

その第一歩として、今年度、今後

の具体的な組織運営および事業のあり方を探るべく、十年後の組織の姿を見据えたビジョンおよび次期中期経営計画の策定に取り組んでいます。

（企画課長 牧野博明）

観光文化事業部

温泉地・温泉旅館の

将来を考える

「温泉まちづくり研究会」の運営

観光文化事業部では、研究調査部とともに、日本でも有数の温泉地（阿寒湖、草津、鳥羽、有馬、由布院、黒川）が当財団に一堂

に会し、共通の課題について語り合い、その方向性を探る「温泉まちづくり研究会」を運営しています。二〇二一年度からは、特に「半歩先ゆくテーマの設定と徹底的な議論、そしてアクション、検証」といったサイクルの実践を重視し、研究会を開催しています。

二〇二一年度は、六月に



「東日本大震災以降、温泉地・旅館に求められている社会的価値（意味）」を、また九月には「温泉地・旅館の長期滞在への対応」について、真剣に議論を行ってきました。二月には、研究会の開催地を栃木県那須塩原市板室温泉「天黒屋」に変え、「アートの精神で取り組む旅館経営」について学び、議論しました。

二〇二一年度は六月に、第一回研究会を、多くの旅館が敬遠しながら「おひとりさま」をテーマに開催。第二次おひとりさまブームの背景や他業種の対応、旅館の取り組み事例、利用者の実態等の調査結果をも

とに、温泉地や温泉旅館の今後の対応について意見を交わしました。

各種の調査結果からは、「社会全体に女性のおひとりさまをポジティブに評価する傾向が生まれていること」、「おひとりさまは今や負ではなく、自分自身の時

間を取り戻すプラスのキーワード」であり、一人を楽しむライフスタイルを身に付けた自立した女性が増えていること」などが浮かび上がってきました。そして議論では、「現在ブームになっている『おひとりさま』は旅館にとっても有望なマーケットになり得る」、「旅館も、一人客といえれば自分の趣味探求を楽しみに旅行する中高年（主に男性）や訳ありの女性の一人客といった従来のイメージを引きずるのではなく、新しい顧客層『おひとりさま』の出現に気づき対応を考える必要がある」と、確認し合いました。

今後も温泉まちづくり研究会では、会員温泉地と当財団が温泉地・旅館の将来について熱く深く徹底的に議論を行い、議論から見えてきた普遍的な価値を世の中に発信し、広く温泉地の魅力づくりに役立てていきたいと考えています。

（主任研究員 吉澤清良）

*温泉まちづくり研究会の詳細は、同研究会ホームページを参照。http://omachi.jp/
*「二〇二一年度温泉まちづくり研究会 デイスカッション記録」などがダウンロード可能です。ぜひ一読ください。



連載 I
あの町この町
第51回

「そこそこ」の哲学——福島県棚倉町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀

(イラストり著者)

JR水郡線は郡山を発つと、広い郡山盆地を南に進む。「いわきもりやま」「いわきいしかわ」「いわきたなくら」そのあとは「ひたちだいがこ」「ひたちおおみや」「ひたちおおた」と変わり、この路線が旧の磐城と常陸を結んでいることが見てとれる。朝六時台が発発で、つぎが七時十一分。そのあとは二時間おきに一本。ただ常陸太子と水戸間は便数が倍になる。同じ路線でも利用のぐあいが大きくちがうらしい。

その少ない方に揺られていた。目ざす「いわきたなくら」までは五十キロあまり、十二の駅を二時間かけて走る。この程度のスピードが人間にはいちばん心地よいらしく、少し眠いような夢見「こちにつつまれる。初夏のころで、田も山も一面の緑。ゆるやかな丘陵があらわれるだけで空が広い。農家の白壁と神社の杜。こういった景観は日本人にとって「原風景」にあたるようで、なにやら懐かしい思いがしてくる。わずか東五十キロの海岸の原発事故で、多くの人が町を捨てたなどと想像もつかない。

福島県東白川郡棚倉町。旅好きの友人にたずねても、「たなくら？」と首をかしげたから、知る人は少ないのだろう。古めかしい駅舎に中年の駅員がひとり。コインロッカーがないとわかり思案していると、よければ預かるとのこと。これ幸いとリュックを預け、手にカメラ一つ。ことのついでに城跡への道をたずねると、「国道を左にすすむと見えてくる」。なるほど、すぐにうっそうとした古木と濠のわきに来た。

棚倉藩六万石。慶長八年（一六〇三）、初代丹羽長重が入ったときは二万石で、二十年後に棚倉城を築いたときは五万石。豊かな土地柄を実証したわけだ。初代が城の完成前に白河へ移り、壁がまだ荒土のままだったので「新土城」と呼ばれたそうだ。

二代目城主に近江の内藤氏が入り、ついで太田氏、松平氏、小笠原氏、井上氏、松平氏、阿部氏とめまぐるしくかわった。お濠の亀が水面に浮くと城主がかわると噂になり、俗に亀ヶ城ともいった。そういえばヘンな記述を見かけた。

「失脚譜代大名の左遷地の様相も」(『幕末・維新全藩事典』人文社)

浜松藩主井上正甫は文化十四年（一八一七）、十代城主として棚倉移封を指示されたが、病氣と称して浜松を動かさず、幕府のお役をやめてまで移動を拒んだ。棚倉城には蛇が多いからイヤだと言ったとか。十二代松平康爵は石見・浜田藩の藩主だったが、密貿易が発覚して毛利家以来の由緒ある土地から棚倉転封を命じられた。その道中は犯罪人扱いで、宿や本陣で宿泊を拒まれ、寺泊りの旅をしたという。「失脚譜代大名の左遷地」といった見方は、このころに定着したらしい。

本丸を囲んで六メートルあまりの土塁、まわりに内濠。かつては土塁の上に多門と呼ばれる長屋のような囲があつて、壁に矢、鉄砲を打つ峡間が四百あまり。角櫓は二階式が東西南北に一つずつ、外濠に面して追手門、

北門、南門などがあった。

外濠は埋め立てられたが本丸跡はよく残っていて、土塁の長さ約六百メートル、グルリと一周できる。古木がていていと枝をのびし、眼下は深い濠で、涼しい風が吹いてくる。本丸屋敷跡の古風な建物は図書館だったが、新しくよそにつくられて取り壊しになる。隣合って資料館があったが、3・11の大地震で半壊、ひと足先に撤去された。北寄りがゲートボール場で、老人がひとり黙々と球をころがしている。城内で見かけたのは、この方おひとり。土塁は格好な散歩コースと思えるのだが、ベンチ一つないところを見ると、あまり使われていないらしい。

「昔日の浪漫あふれる城下町」

絵地図に大きく掲げてあって、町のキャッチフレーズのようだ。「豊かな自然と歴史に恵まれた六万石の城下町」「スポーツと文化と健康をテーマにした体験型リゾート地」ともある。

「——さあ、たなぐらで思いっきり深呼吸して下さい。」

西南には八溝山、東は阿武隈高地、郡名に「白川」をもつように水が豊かで、大らかな山河に恵まれ空気がうまい。町には都々古別神社といつて日本武尊にまつわる古社が上の宮、中の宮、下の宮と三つあり、おいしい空気と水の地に古くから人が住んできたことが見てとれる。郊外の一つを訪ねるにはタクシーが必要だが、あいにく大きな葬式があつて出払っている。町内の詰所のおばさんがテキパキと無線をとばし、一台が会葬のあいまに抜けて来ることになった。

「のんびりした町ですね」

お茶をいただきながら、おしゃべりをした。今年（平成二十四年）現在で、人口二万五千とちょっと、「へりもせずふえもせず」といってこそ、おばさんによると、「そこそこ」に暮らしていると、暮らしている。よくわからないが、地道に暮らすということなのだろう。

右中央やや下に棚倉藩。大日本行程大地図（天保十四年刊）より



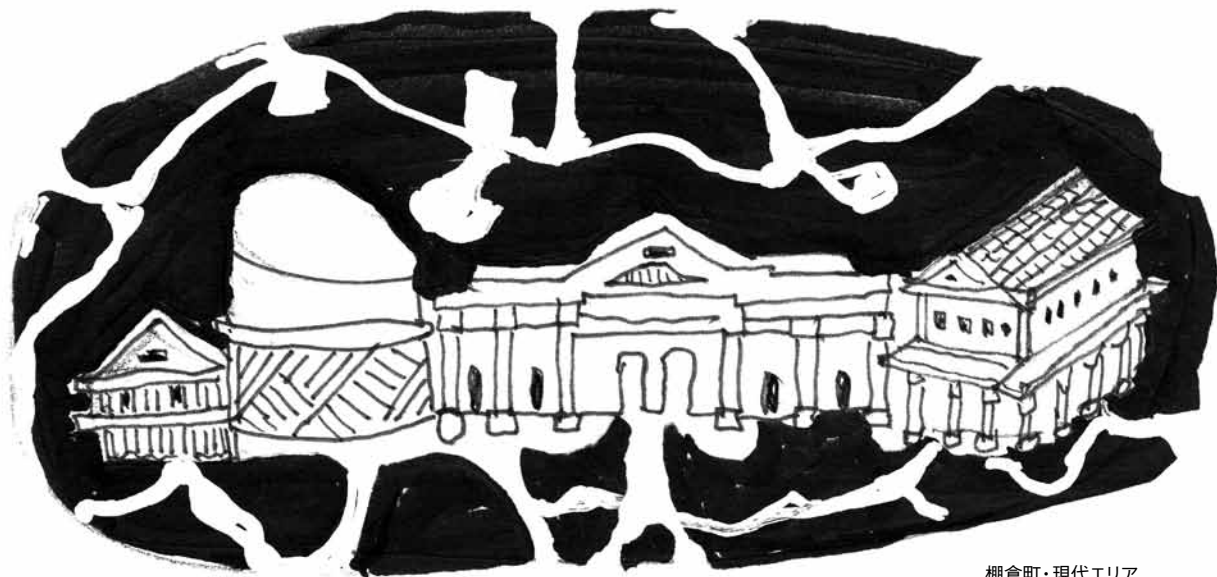
「食べ物屋も飲み屋も安いですよ」

ボツたりは決してしない。利益はそこそこにしてつづけていると、ちゃんとしちゆく。欲を出す店はずぶれていく。おばさんの目は、小さな町のあり方とモラルを正確に見つめている。

南の郊外の八槻都々古別神社は拝殿、本殿とも雄大で美しい。農の神とされてきて、四百年つづく伝統行事の御田植祭が伝わっている。都々古別三社の中の宮にあたり、このついでに西の郊外の上の宮、馬場都々古和氣神社に寄ってもらった。唐破風の拝殿が壮麗で、樹齢数百年の大木がまわりを取り巻き、陸奥一ノ宮の風格をただよわせている。

同じ「こわけ」でも、上の宮は古和氣、中の宮は古別。そもそも「つこわけ」とはどういう意味か。

「さあ、なんのことですかね」



棚倉町・現代エリア

タクシーの運転手は顎を撫でながら、のんびりと答えた。この辺りは「つつこわけ」が神社の本筋だそう。

町内には弘法大師ゆかりの山本不動尊をはじめ、宇迦神社、白河国の開拓にかかわる地藏尊、僧行基が刻んだ観音菩薩をいただく常隆寺、さらに蓮生寺、長久寺、蔵光寺……。城下町におなじみで、寺がちらばっている。「紫衣事件」といって、紫衣着用の勅許をめぐる幕府と朝廷が対立した際、幕府に抗議した玉室和尚が流罪になり、棚倉藩に配流されたときの謫居跡もある。

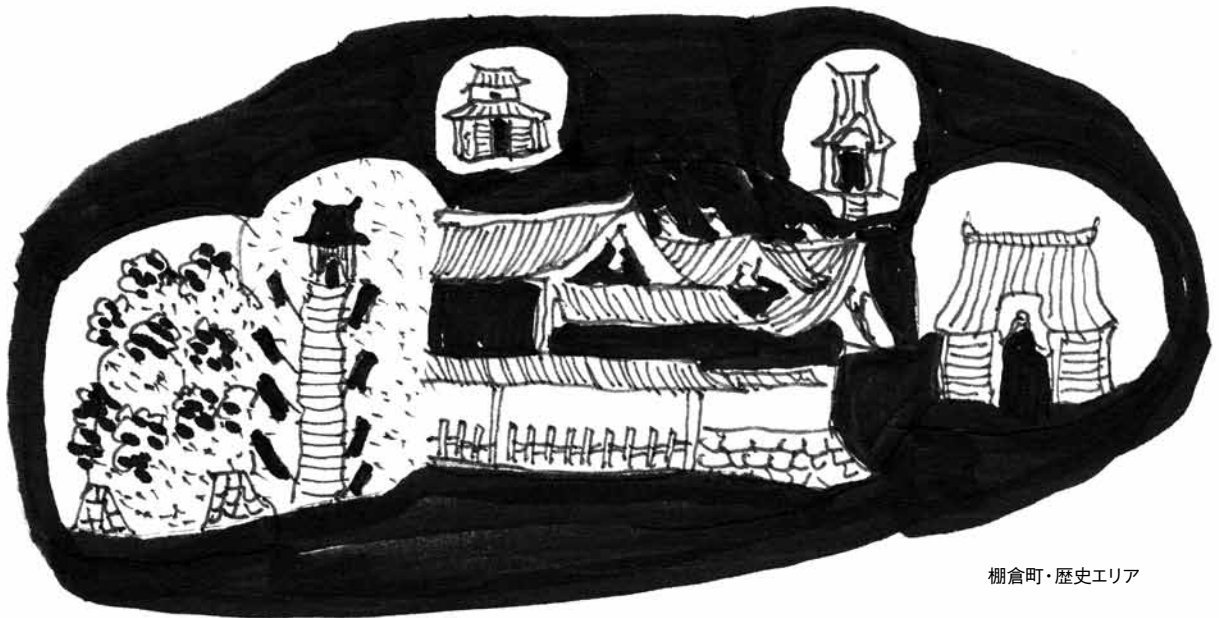
JRの線路をはさんで西側を歴史エリアとすると、東側は現代エリアで、文化センター、総合体育館、町民プールのほか、第三セクターリゾート「ルネサンス棚倉」がゆるやかな丘陵にひろがっている。いわく、「スポーツもカルチャーも保養も研修もすべて引き受ける超多才テーマパーク」。

さしあたり車で一巡したが、おそろしく広い。レストラン、売店をそなえたホテルを中心に、インドア温水プール、クアハウス、野外ステージ、コテージ1号・2号、バンケットルーム、客室、宴会場つき新館パルテノン。乗馬施設は野外コースのほか、八百平方のインドア乗馬コースもそなえている。テニス場はインドアコートを含めて全三十面。人口一万五千規模の町で、はたしてこれだけ巨大な施設を維持できるものか？

「そこそこやってるようです」

運転手によれば、高校や大学の体育団体が研修、合宿にやってくる。パルテノンでは会議、結婚式、パーティ。ただ乗馬施設は馬に手を焼いている。コースは整備したが、馬の世話までは考えていなかった。

「ルネサンス」の名づけは共同出資の社名からだだが、町としては「再生（ルネサンス）の意味」をこめてのことだろう。リゾートとスポーツ、さらにカルチャーとゴルフとアーチェリーを併合させた。文化センターは「倉美館」といって、目をむくように大きい。レストランで玉どんをいただき、



棚倉町・歴史エリア

クアハウスの湯につかりつつ、六万石城下町と現代版再生システム共存の難しさを思いやった。

十代城主が幕府内の出世を棒に振ってまで棚倉を拒んだのは、遠江浜松からすると、北の陸奥は地の涯のような気がしたのではなからうか。十二代の松平は、たしかに不祥事で浜田から転封になったが、密貿易は当時、西国・九州の藩はどこもやっていたこと、隠密に見つかったのが不運にすぎない。浜田は六万一千石、そのころの棚倉は六万四百石、禄高もほとんどへらされていないのだ。運を変えるつもりがあったのか、藩主松平は山本不動尊に開運祈願の石灯籠を寄進。そのせいか三代のちの十五代城主のとき、めでたく川越に移った。このとき棚倉の禄高八万四千四十三石。幕末最後の阿部氏は十万石で城主となっている。水ゆたかで丘陵は開拓しやすく、蛇が多いところか、いろいろな産物のみのる土地なのだ。

その伝統はいまなお脈々と生きており、棚倉町物産振興会発行の「物産ガイドブック」には、「自然と歴史に育まれた自慢の逸品」がまつている。つぶあんであまみをおさえた玉屋の大福、素材にこだわった甘盛堂のいちご大福、昔なつかしい丸石のおぼけせんべい、創業文化年間、伝統の味は久桁屋人野堂の羊羹、ほどよい甘さ、おぼまのまつたけ最中。辛党には今年が創業百年、藤田屋本店の福賑茶、自然の風味そのまま、大木酒店の粕漬。ほかに家伝「つるりん蒟」の小松屋本家、山里の味、金子のじねんじよ、変わり種には日本メグスリノキ本舗謹製、落葉高木メグスリノキを原材料にした健康茶「肝目メグスリノキ茶」。

平和な町だが、幕末は大きく揺れた。水戸で旗上げた天狗党が筑波山にこもったとき、棚倉藩も出兵、八溝山へ逃れてきた残党を西の山間で処刑した。幕府の命令で余儀なくの思いがあったのか、藩主は三界万霊塔を建立して弔った。慶応四年（一八六八）の戊辰戦争にあたり、東北の大半の藩がそうであったように去就に苦慮した。はじめは官軍に兵

を出したが奥羽越列藩同盟が成立するやこれに加わり、白河城を中心に
して激しく戦い、多数の死者を出した。ついで官軍の棚倉城総攻撃。城
は落ち、周辺の古町を焼失。

しかし、遠い昔はなしである。城跡の南が旧の町筋で、そこそこの哲学
を商いに生かしているのだらう、シャッター街にもならず、昔ながらの
店が健在である。どこかで見たことのある建物だと思つたら、川越の「時
の鐘」を模したもの。川越市と友好都市を結んだ記念というが、大よろ
こびで去つていった藩主の移り先と友好を結ぶところがなごやかである。

初夏なのでめだたないが、いたるところに桜の古木が列をつくっている。
中世に館のあつた公園、棚倉城跡、一里塚に添えられたしだれ桜、所々方々
の神社や仏閣、春になると町中が薄紅色に染まるにちがいない。

およそ知られることの少ない町だが、観光ズレしていなくて、観光ス
ポットにあたるどころも、ごく自然のままにのこっている。その上で矛盾
したことを言うようだが、せめて駅にはコインロッカー、城跡にはベンチ、
要所に簡単な道しるべが欲しいものだ。現代エリアの何百分の一かの予
算で歴史エリアが活気づき、その活力が「自慢の逸品」にも及ぶのでは
あるまいか。

車をとめ、自動販売機でジュースを買った若い男女が、ストローでジュ
ースを飲みながら、大きな絵地図を見上げていた。

「ムカシビの……」

男が言いかけ、女性が「セキジツ」と訂正した。

「つぎは……」

「ロマンかな——たぶん」

苦心のキャッチフレーズだろうが、格式が高すぎて、いまの若い人に
は少々無理なようである。

午後の便で郡山へ出るつもりで早目に駅にもどってきた。預かつても
らったリュックのお札を述べていると、駅員が心配げに空を見上げている。

いつのまにか黒雲に覆われていて、やおら大つぶの雨が落ちてきた。た
ちまちそれが、しのつくような雨になった。

駅舎にいたので、ときならぬ大雨をおもしろがっていると、そんな場
合ではないという。今朝早くにもいちど豪雨があって、土が湿っている。
線路の冠水と運転中止が心配だ——。

まさかと思つた。改札口の上の表示は、電車が二つ手前の駅に着いた
ことを示していた。あと五分もすればやってくる。しのつく雨とはいえ、
これぐらいで運転を止めていたら、のべつ中止になるだらう。たしかに
そうだが、棚倉近くは冠水常習地で、どこかがつかったら最後、運転
できないという。

電車が来た。雨を払つてとび乗った。心配げに雨を見上げている駅
員をのこして、こともなく発車。やみはしなが、ひどくもならない。
心配症の駅員さん——と思いかけた矢先、車内放送で運転中止が告げ
られた。冠水の個所を超スローで通過して、磐城石川駅どまり。JRが
用意するタクシーに乗り換えてほしい。

それでわかったが、乗客のうち一般客は四人だけで、あとは通学の高
校生だった。中途運休には慣れつこのよう、アナウンスを聞き流して
おしゃべりに余念がない。

そんなわけで見知らぬ人とタクシー相乗りで、国道118号を北に
走った。おかげで途中に猫啼ねこなみという奇妙な名前の温泉があるのを知った。
相乗りの男性によると、和泉式部のペットにちなむそうだ。木につ
ないでいつてしまったので猫がなきつづけ、その木の根かたから湯が湧
き出したという。

「ま、たしかなことはわかりませんがネ」

その人は少し上手の母畑温泉ぼはたが猫啼ねこなみよりも好きだそうだ。そこそ
の旅の終わり、思いがけないことで何やら得をした気分だった。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り72

三年後のキリマンジャロから

旅行作家 山口 由美

ソーシャルメディアが個性派宿の追い風に

以前、「インターネットと宿」と題して書いた時、取り上げた宿がある。タンザニア、キリマンジャロの山麓にある「マウント・キリマンジャロ・ビュー・ロッジ」だ。その名の通り、朝に夕にキリマンジャロの霊峰がよく見える絶景の宿である。

インターネット上での出会いから、私がこの宿に宿泊したのは、二〇〇九年七月のことだ。開業は二〇〇六年というが、当時は、まだまだお客が少なく、私と同行のカメラマンは、貸し切り状態のなか、開業以来二度目の日本人客として、最大級のもてなしを受けたのだった。

地球の裏側から来た客がよほどうれしかったのだろう、最後の夜、太鼓をボンゴボンゴとたたきながら「ユミとタケシ（カメラマンの名前）をたたえる歌」を即興で歌ってくれた感動は忘れられない。

短い滞在だったが、宿の主人のフィリップは、その後もしばしばメールをくれた。一度は金の無心をされ困ったこともあったが、しばらく無視していると、何事もなかったかのように「ジャンボ（こんにちは）！」とまたメールをよこすのだった。

やりとりは、いつしかフェイスブックに移行した。新年の挨拶、大震災の際、フィリップは思い出したように「ジャンボ！」と連絡をよこした。

当時、お客の少ないロッジは、村人のたまり場になっていて、たき火にあたりながら彼らとよく話をした。ロッジで手配してくれたコーヒー農園の村と滝を巡るエコツアーにも大勢の村人がぞろぞろとついできた。そのメンバーの中にエリサンテという若者がいた。トウキョウでは、三分おきに電車が走るという話をしたら目を丸くしていた。

帰国後、フィリップよりも頻繁にメールをよこしたのは、このエリサンテだった。彼は、その年の秋から麓の町のカレッジに入学したとのことだった。近況を報告しながら、三回に一回は、遠回しに金の無心をする。でも、こちらが取り合わないと、また忘れたように別の話題を振ってくる。

キリマンジャロの麓から時々届く便りに劇的な変化が訪れたのは、今年になってからのことだ。

トリップアドバイザー®でマウント・キリマンジャロ・ビュー・ロッジが国立公園内の十二軒の宿の中で一位になったとの知らせが届いたのである。口コミ旅行サイトのトリップアドバイザーは、近年、急成長している。投稿による評価は必ずしも当たっているとは限らないが、世界の少なからぬ旅人が、旅行の計画を立てる時、これを参考にする。私もその例外ではない。

トリップアドバイザーで一位になる宿は、必ずしも有名な高級ホテルとは限らない。例えば京都では、ぶつちぎりの一位をキープしているのは、



マウント・キリマンジャロ・ビュー・ロッジから朝な夕なに霊峰キリマンジャロを眺める

(トリップアドバイザー®提供)

ホテルムメという祇園にあるたった四室しかないデザインホテルである。いつも三カ月くらい先まで空室がないほど、混んでいる。

マウント・キリマンジャロ・ビュー・ロッジもそうした人気宿の仲間入り

を果たしたのだ。三年前、お客のいないがらんとしたダイニングルームで、フィリップとテーブルを囲みながら、どうやってこの宿の存在を知らせたいか、真剣な表情で相談を持ちかけられたことを思い出す。

もともと手作りの小さなコテージは居心地よく、キリマンジャロの絶景は素晴らしかった。写真のたくさん掲載されたホームページの出来もよかった。ただ、それを広く告知する方法だけがなかったのだ。今のソーシャルメディアの普及は、そんな彼の悩みを解決したのである。誇らしげに報告するフィリップは、もう金を無心してきたころの彼ではなかった。

カレッジを卒業したエリサンテからも報告が届いた。フィリップのロッジが成功を収めたのを見ての決心なのか、エコツアーの会社を始めたことだった。

つい先日フェイスブックにマウント・キリマンジャロ・ビュー・ロッジのページを設けたとの連絡があった。今や世界七十五カ国からのゲストがいるという。せっかく高い評価を受けているのだから、宿のホスピタリティーをもっと高めなければ、との決意が熱く語られていた。私は三年の月日を改めて感慨深く思った。

今年のロンドン五輪は、ソーシャルメディアが普及した初めての五輪といわれた。フェイスブックやツイッターを通しての選手の生の声は、新鮮な感動を私たちに与えてくれた。一方、不適切な発言で選手が追放される事件もあって、ソーシャルメディアの功と罪を映し出す結果となった。

ホスピタリティー産業におけるソーシャルメディアの功と罪は何なのか。この答えはこれから姿を現すのだろうか。だが、少なくとも個人的で良心的な小さな宿にとって、追い風になることは確かだ。エリサンテの会社のフェイスブックも始動した。さらに三年後、キリマンジャロの麓の「友たち」はどんな未来をつかむのだろうか。

(やまぐち ゆみ)



新着図書紹介

全国各地で観光を通じた地域振興の取り組みが進むなか、町の歴史を伝える土蔵も貴重な観光資源として脚光を浴びる時代を迎えている。喜多方市や栃木市、川越市などにおける近年の取り組みは、地元の風土や歴史の上に成り立つ生業や暮らしこそが、地域観光の原点であることを思い知らされる。

『京都土壁案内』（塚本由晴・森田一弥著、学芸出版社）は、書名の通り、京都の町を歩きながら、寺社や茶室から土塀に至るまで、長い歴史を刻んできた土壁の魅力をもとく京都の建築・街歩きガイドだ。東本願寺のなまこ壁や京都御所の筋塀、祇園・一力亭の赤土壁などとともに、下御霊神社の土蔵についても丁寧に



A5判 144ページ
定価 1,900円
学芸出版社

説明されている。聚楽土、稲荷山黄土、九条土、桃山土、浅葱土、錆土など、豊かな土に恵まれた京都ならではのユニークな土壁文化を知ることが、各地で土蔵を見る楽しみも深めてくれそうだ。

（挑主）

本書『新たな集客に挑む！インバウンドBUSINESS』（日本観光振興協会）は、外国人旅行者への対応の多様な事例を紹介し、そのヒントを国内の観光産業はじめ広く産業界に提供し、産業連携によるインバウンド市場拡大の重要性を編集コンセプトとしている。PART1では、今後の観光振興に重要な役割を担う、流通・飲食等を含む二十五の組織への取材で取り組み事例が紹介され、各組織のビジネスのポイントが参考になる。PART2では、実際にお客様と接する際の基本が簡潔に表現され、PART3は国・地域別に宗教・国民性等の留意すべきポイントを解説。イスラム教徒やベジタリアンが口にできない食材の記述は「食」の



B5判 180ページ
定価 1,300円
日本観光振興協会

関係者に参考になる。PART4資料編（付録CD-ROMに収録）のPOPやメニュー表作成のための四カ国語（英・韓・中・簡体）のツールからは、受け入れ環境をより良くしたいという発行者の意図がうかがえる。（片桐）

利用状況

ベストリーダー（2012年4～8月）

当図書館への来館者によく閲覧されている本を紹介。

【旅行ガイドブック部門】

海外旅行では、

- ・『地球の歩き方フランス2012-13』（ダイヤモンド・ビッグ社）
- ・『地球の歩き方MOOK/パリの歩き方2012-13』（同）
- ・『るるぶフランス2012-13』（JTBパブリッシング）

国内旅行では、

- ・『まっふる秋田2013』（昭文社）

【一般読み物部門】

- ・『日本の聖地ベスト100』（植島啓司著、集英社新書）
- ・『LCCの使いかた』（イカロス出版）
- ・『ろぼのいる村』（西出真一郎著、作品社）

館長のつぶやき

日本政府観光局（JNTO）の方が来館。JNTOニューヨーク（NY）事務所60周年記念の記事のため、当時一体だったJTBのNY事務所とJNTO=JTA日本観光宣伝事務所の写真等の情報をお探しのこと。社の50年史と70年史をご案内したが、後日倉庫より、社の米国法人の20年史と写真も見つかった。他にはない情報が、旅の図書館にならある、という蓄積の重要性。東京、そしてNYで、インバウンド観光に従事した忙しい日々がよみがえった。

特別展示のご案内

東京駅からのまち歩き

2012年10月1日（月）～2012年11月30日（金）

2007年にキャッチフレーズ「東京駅が、街になる。」で始まった東京駅再開発事業が、2012年10月に一つの大きな節目を迎える。1914年に開業した東京駅丸の内駅舎（赤レンガ本駅舎）の保存『復原』がいよいよ完成するのだ。同駅舎の完成は「東京の玄関口が生まれ変わる」「東京に新しい風景が誕生する」「かつてないほどの規模で歴史的建造物が復元される」等のさまざまな意味合いを持つが、普段何げなく通り過ぎてしまう駅構内やその周辺をじっくりと探索する、またとない機会になるだろう。

本展では、「東京駅からのまち歩き」をキーワードに、東京駅とその周辺地域（丸の内、八重洲、日本橋等）の歴史、建築、街並み、宿泊施設等、さまざまな切り口から選んだ図書や稀観書を展示します（『鉄道と街・東京駅』（三島富士夫著、大正出版）、『東京駅の建築家 辰野金吾伝』（東秀紀著、講談社）、『大名小路から丸の内へ』（玉野惣次郎著、菱芸出版）等。ぜひ当館を訪れて「東京駅からのまち歩き」にお出掛けください。

*詳細は、ホームページ<http://www.jtb.or.jp/旅の図書館・インフォメーション>へ

■地域のことがあったに学ぶインバウンド推進のツボ②
 昨年発行の『地域のことがあったに学ぶインバウンド推進のツボ』の続編。今回は主に資源の見つけ方や生かし方に関することがあったを中心に取り上げています。二〇二二年五月発行。

■訪れるに値する価値を自ら創る
 ～今、求められるビジットデザイン発想
 当財団主催「第二十回旅行動向シンポジウム」採録集。シンポジウムでは、「インスパイラック長期滞在の旅」という三十日間方所滞在型の旅行商品に成功させた㈱ワールド航空サービス・菊間潤吾社長、日本にキギネオニングという自然を生かした新しいアクティビティを導入した㈱キギネオニズなどの事例から見えてくる時代の読み方、価値創造の知恵や発想の方法について、マーケティング・コンサルタントの谷口正和氏に解説していただきました。重要なのは、観光に関わる人ひとり、人生という時間にもっとも敏感になり、旅を通してすてきな時間の過ごし方や生き方を提示し、訪れるに値する価値を創り出す「ビジットデザイン」発想です。二〇二二年六月発行。

■マーケット・インサイト2012 日本人海外旅行市場の動向 最新刊
 日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。二〇二一年の最新市場動向をカバール。当財団の独自調査を基に、変化の下に働く中・長期的ダイナミズムを明らかにしています。日本語版、英語版あり。二〇二二年七月発行。

■自主研究レポート2011/2012
 当財団が自主事業の環として取り組んでいる自主研究の成果をまとめた論文集。観光を取り巻く領域はさらに広がり、多様な観点からの議論が行われています。そうした流れを反映し、温泉地の住民意識を通して今後の温泉地の在り方を探る研究や、観光地を訪れた観光客の「感情」や満足度の調査を競争力の高い観光地づくりにつなげる研究など、新しいアプローチを試みた研究も収録。併せて当財団が主催する研修事業（セミナー、シンポジウム等）や出版・広報の概要についても紹介。二〇二二年八月発行。

※当財団出版物の注文はホームページからお願ひします。
 担当：公益財団法人日本交通公社 観光文化事業部
 電話 03-5265-6073 <http://www.jtb.or.jp>



次号予告

●観光地の競合環境のグローバル化が進む状況下、より効果的・効率的な観光施策を展開するために、科学的アプローチによる観光政策や観光地の状態の客観評価（指標の利用）が注目されています。持続可能性指標の活用については、海外を中心に研究と実践が重ねられてきていますが、国内での実績は皆無に等しいといえるでしょう。次号の特集では、その方法論を探り、有用性の検証を試みます。

当財団からのお知らせ

「シンポジウム・セミナー開催のご案内」

●平成24年度 観光実践講座

「人を活かし、まちを活かす観光の考え方」見えない価値を見せる「まち歩き」の実践
 二〇二二年十一月八日（水）～九日（金）

●会場：当財団大会議室（朝日生命大手町ビル17階）

今年各地で人気が高まる「まち歩き」に着目します。それは単に点から点への移動ではなく、ガイドさんどぶら歩きながら地元の人と話し、食べ、笑う——その時間、その空間（まち）を楽しんでもらう観光です。特別講師に「長崎さるく博」〔大阪あそび歩〕（第4回観光庁長官表彰受賞）を仕掛けたプロデューサーの茶谷幸治氏を招き、また、住民主体の各地のまち歩き事例を取り上げます。見えない価値を見せる「まち歩き」の意味を一緒に考え、実践に役立つヒントをお持ち帰りください。「まち（都市）」限定ではなく中山間地にも応用できる内容です。詳しくは当財団ホームページへ。

●第22回旅行動向シンポジウム

二〇二二年十一月十二日（水）午後

会場：フクラシア東京ステーション 朝日生命大手町ビル5階
 二〇二三年の旅行マーケットの見通しを発表する年末恒例のシンポジウムです。テーマ等の詳細が決定しましたら当財団ホームページに掲載いたします。

当財団ホームページURL <http://www.jtb.or.jp/>

編集後記

◆月、四月、七月、十月の季刊誌としての改訂版「観光文化」第一号をお届けしました。
 ◆当財団がお付き合いさせていただいてきた地域の方々からの寄稿やインタビューを通じて、地域活性化につながる概念とされる「観光まちづくり」「観光地づくり」について考察する特集にしました。「特集テーマからの視座」で研究調査部梅川が担当として考えを述べさせていただきます。今後、研究員が交代で担当分野から特集を組んでまいります。

◆「研究成果の紹介」では調査研究を通じて当財団研究員が知り得た知見の一部をご紹介します。「JTB通信 財団活動のいま」では当財団の最近の活動状況を「紹介させていただきます」。「旅の図書館掲示板」上で、新着本紹介に加え、旅専門の当館がどのように利用されているか、普段目に触れることのない稀観本を「覧いたたく特別展示（二カ月間）の企画等」を紹介します。

◆表紙写真や「風致探訪」（次号以降に掲載）で写真家樋口健一氏に、レンズを通して各地の素晴らしい風景を文とともに紹介していただきます。連載「あの町この町」ではドイツ文学者、エッセイスト池内紀氏が各地に足を運ばれる「一歩二歩から見え感じた」ことを、歴史にも触れながら紹介していただきます。連載「ホスピタリティーの手触り」の旅行作家山口由美氏は、日本・世界各地を訪れて自身の感性から気づいたことや経験を通じて、人々にとっての心地よさにつながるヒントを示唆してまいります。（片桐）

観光文化215号やバックナンバーをPDFで閲覧できます。
 URL : http://www.jtb.or.jp/publishing/index.php?content_id=5



Cover Story

八幡山山頂に郡上八幡城が聳え立つ。急坂を上っていくと目に鮮やかな紅葉が白壁とマッチして美しい光景を醸し出す。城の最上階からの町並みが歴史を感じさせて清々しい。

(Photo and Words by 樋口健二)

機関誌

観光文化 第215号

第36巻5号通巻第215号

発行日：2012年10月10日



発行所：公益財団法人 日本交通公社
東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F
〒100-0004 ☎03-5255-6071
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F 観光文化事業部内
〒100-0004 ☎03-5255-6090
<http://www.jtb.or.jp/publishing/>

編集人：片桐美徳

発行人：志賀典人



制作・印刷：株式会社 REGION

禁無断転載

ISSN 0385-5554